

LICENSED PRODUCT
Black
3/Color
White
Magenta
Red
Yellow
Green
Cyan
Blue



60 65 70 75





自序

わが歌をわが出版するは古來例かといふ
人もあれと西洋にはめづらしからぬことな
りさりとして余はあながちに西洋を學ばんと
にもあらず又例なしとて憚らんとにもあら
ず唯書肆の公にしては如何といふにまかせ
て詠草の下がきを與へたるのみ余が歌の拙
なきは自ら知るところなれども之を好むの
點に至りては世の上手たちに劣るべくもあ
らざる幸にして此書を手にするの君子あら

自序

わが歌をわが出版するは古來例かといふ
人もあれど西洋にはめづらしからぬことな
りさりとして余はあながちに西洋を學ばんと
にもあらず又例なしとて憚らんとにもあら
ず唯書肆の公にしては如何といふにまかせ
て詠草の下がきを與へたるのみ余が歌の拙
なきは自ら知るところなれども之を好むの
點に至りては世の上手たちに劣るべくもあ
らま幸にして此書を手にするの君子あらば

拙作としてな慈愛の叱評を吝み給ひら

明治二十八年四月

建樹しるす

山したみづ

大和田建樹作

花をあるじの巻 明治十六年詠草

月前梅

たつもうし花を今宵のあるとにて月さへ宿る梅のこのもと

水邊霞

ひきのぼす舟のゆくへもたえ くに霞ながるゝ淀の川づら

古戦場

駒どめし田づらいづことかへりみる額にさむき比良の山風

春曙

花のいろに霞むと見えし月影の空にわらるゝあけぼのゝ山

春雨

歸りくる花見車もいそぐなりかすみの末やあめとなるらん

春夜

鐘の音は霞のおくにふけそめて月影しづむしのばすの池

閣龍

大海に人のかよひぢかけそめし君やこのよのかづらきの神

讀書

讀む儘にまらぬ事のみそひゆくを物しる爲に誰かよむらん

酒

けさの又手にもふれじと誓ひしをいつ盃のかすつもりけん

隣梅

をすのうちの琴のしらべもふきませて中垣こゆる梅の春風

庭花

野山にと思ひたちし庭ざくらさかぬきのふの心なりけり

夕花

野をひろみかねの音する寺もあし心しづかに花にくらさん

月前花

櫻花あかね餘りにたをり来て月のかけさへかざしつるかあ

花のころ上野にて

さえくれし松のあらしのおどかへて花にしづまる岡の春風

蛙

ほろくど柳花ちる山川のいかだのうへにかはづなくなり

雨の日上野にて

雪まじりふりくる雨にとる傘のしづくもにはふ花の木の下

月おもしろき夜墨田川に遊ぶ

四

さきつゞくつゞみの花のいろ見せて水上遠くにほふ月かけ
匂ひくる風をしるべにたちよれば雪の上より月予こぼるゝ
川舟の花よりほかの花をのせて月の夜ざくら見る人やたれ
まくら橋をわたる

行きくれば花の下ふしせし人や橋にまぐらの名は負せけん
花のもとに鬪體あり

おどろけば梢のいろにあらそひし花の姿もはるの夜のゆめ

遅日

今朝わけし梢もとほくなりけり花の木陰に一ねぶりして

山吹

中垣のへだてばかりにゆひすてし庭の山吹はなさきにけり

ある夜

ほととぎすなく一聲にさめよけりふみを枕のうたゝねの夢
人々つとひて忠臣藏を題にてうたよみける時か
ほよの前を

いまだしる女の才いなかゝにつまの身をきる劍ちりとは
おかるを

さしのばす鏡にうつる水莖の跡くらからぬ身とはしりさや
西安庸の母の一周忌に 夏懐舊

五月雨のふりし昔をしのぶらんしをれぬのべの夏草もなし
また 夜郭公

をちかへりいたくななきそ郭公さかでも袖のぬるゝ今宵を
水邊螢

五

二つ三つはし見えろむる水の上にそひゆく影や螢なるらん

五月雨

晴れなばとまちし川原の螢狩思ひもたねてふるひかすかな

蓮生法師

たをりつる若木の花の一本や蓮のうてなのしをりなるらん

菅公

つくしがた波まのかけゆくもらぬを月の都の霧ふかくして

夏月

枯れ残るいはまの水をいのちにてすむ影ひろし夏の夜の月

照り渡る日影をわびし言の葉の恥かしきまですめる月かな

夕蓮

はちすばのひろばがくれにさく花を時々見せて夕風そふく

八月十日國府臺に遊ぶ

寺守のきてもはらはぬ古塚にすゝきたむけて秋かせそふく

海邊月

武藏の海すみゆく月の末見えてひとすぢくろきあはの遠山

安房の浦めぐりしける時

相摸瀉雲こそかゝれあはの海のしほけの末や雨となるらん

うちよせし波の名残とみる迄に磯のしらゆふ花さきにけり

江嶋にて

つたひこし磯ぢいたえて月影をよもにめぐらす神のしま山

鳴姫の秋のみけしやみつぐらんどきていあらふ波の白木綿

薄

おなじ色に見えし夏野の草葉よりすゝき分れて秋風ぞ吹く

菘

こよみなきわぶ山ざとの袖垣よ菘ころ秋をしらせがほきれ

秋草花

七草の外よあまといしらざりし庭のかまつか花咲きにけり

もちの夜雲きし

何ごとも心にたがふ世の中にすめばこよひの月もありけり

秋動物

わけまよふ露の末野の道さえてすすきのおくに狐なくなり

十月廿日本居大平翁の五十年祭の會に 對月懷

昔

其かみの秋の露をやかけつらんぬれぬたもとの月影もきし

小幡八重子の庭に菊あまたうゑたり

おきわたす露の光もいろくにはほひおくあるきくの花園

俊寛の能を

纜をときすてられて残る身のうらみや舟にのりてゆくらん

夜 菊

暗の夜もをりこそまよへふく風のしるべあまたの菊の花園

朝 菊

月影の空に見おれてあくる夜のかきねに残るしらぎくの花

折紅葉

山風のまらぬ先にとさをりつる袖にあやなくちる紅葉かな

寺落葉

あか井くむふもとの道らうづもれぬ御堂やいかに木枯の風

初 雪

富士の嶺の物と眺めし白雪を今朝日宿に見るぞうれしき

千鳥

漁りするあまのゝり火影瘖せて洲崎の月に千鳥なくなり

冬月

水鳥のさちるひまなき池の面を去づかにめぐる冬のよの月

薄水

白鷺のおりぬる見ればしのばすの池の氷らぬ方もありけり

霰

ひとしきり鳥を空にさわびせて霰こぼるゝ木がくれのやど

時雨

山ざとの紅葉見よとてこし人をふり留めさる夕しぐれかな

年市見ありきて

いそがしきまはすの市の人心まらずがほにも梅かをるなり
いまいくの寝なばと春をまちむびし昔戀しき年のくれかな

山みちの巻

明治十七年詠草

風前雪

つむじ風かさどられじとたゆたへば行手うしなふ雪の山道

二月ばかりおもふことありけるに

むすぼれし心の氷とけぬ身をよそになしてもきゆる雪かな

谷鶯

わけのぼる谷のはそみちつき消えて小笹がくれに鶯のなく

野霞

霞む日のなさけなまけりまよひいる野守のいほの花の一本
いつしかと野火のけむりの面影に立ちかはりたる朝霞かな
三月のはじめ近きあたりには火の災のありける跡
を見めぐりて

たち残る木陰ばかりを命にて焼野のさぐす夜やわかすらん
春 曙

花の雲鴈の羽風のほかにまたみそらの海にたつ波もなし
浦春月

磯山の花にくらして浦づたひ歸るとすれば月もいでにけり
ところと の花見めぐりける日

神田山まつの下風身にしてみていがきにつもる花のしらゆき
人のゆくすみだ川原をふみかへて龜戸の杜に花を見るかな

人に契りふきたるかへり事まつとて

れもへかしまつ身になまて山里の花のたよりの心ながさを
古戦場

ちりはてし若木の花のあとくへば春風寒き須磨のふるてら
岡郭公

郭公なくや上野のをかつとき月にかげさすまつばらもなし
深夜五月雨

うしみつの鐘は枕に音消ぬて五月雨すこく夜はふけにけり
雨 晴

たつ鷺のもくへも見えて湊江のあし原つとき雨晴れにけり
童のもて遊ぶ畫卷のはしに

かくれじと渡りあらるふ宇治川の波に急がぬ人もありけり

夏 夕

夕立の雲かへりゆく山のはに残る日影もすゞしかりけり

暑

笹のはもうごかぬ岡のいづかたよ風はかくれて夕待つらん

竹風夜涼

風ふけば竹の葉ごしの里見えて動くもすゞしともし火の影

漁 火

ままつとりねにゆく沖の洲崎よりうかびいでたる漁火の影

夏眺望

うゑはてし夕べに見れば垣つ田の早苗につゞく遠のまつ原
夕立のあらひすてたる青空にすゞしく残るふじのとほやま

朝 顔

うなる子が數へもらしと朝顔の花嬉しくも夜のあけにけり

秋 雨

瘦せのこる池のはちすに風見えて夕ぐれ寒くわたる雨かな

擣 衣

道もなきすすきぶくれの山ざとを月にしらせて衣うつなり

海邊秋

衣うつ音たえにけり浦のあまの月の夜汐やくみにいでけん

旅泊秋

みなとぬまおちくる鴈の聲ふけてかぢの枕に秋かせぞふく

十一月二日上野の競馬を見て

まけばうらみかてばよろこぶ人々のきはふ心もあはれ一時

時 雨

一さかりかへりざきする山梨の花にねたくもふる時雨かき

残菊

水鳥のさきぐ羽音におどろけばまどうつ月の影しぐるなり

寒月照松

さえ渡る霜夜の月にひとさかり心たかくもにはほふきくかな

虫聲幽

さえ渡るかれのゝ松の霜の上に影ほそりてもすめる月かな

山路霧

虫の音もあるかなきかになりけり野分にあるゝ夕暮の庭

虫

わけぬとて宿はいでしを鈴鹿山夜を残してもたてる霧かな

秋曙

夕風のまつの梢にまづまりて虫になりゆくあきの野邊かな

田氷

まのばすの汀はるかに雁おちて月影まらむわけぼのゝさと

曉鐘

ふみわけて小田におりゐる白鷺の跡よりとけてゆく氷かな

鉢木の能を

月影のまらみもはてぬ山のはにわけぼのいそぐ鐘の音かな

宮詞

折りたきし雪のしたある埋木のけむり霞きて春のきにけり

いつか又とらはの數にえらばれて花見車の御どもつかへん

雪晴るよ

日影さすたかねの雪をあらためて谷間におろす松の朝風

海人

あま少女汐くみさしていそぐなり網引の船やいま歸るらん

風のこゝちにわづらひて少しおこたりがたにち

りけるひまもなくまたつよりければ今の酒もや

めよと醫師のいふに

竹の葉のつゆの命も消ぬべしまたさえかへる夜半の嵐に

名所冬

枯れ残るすすきのかげもすごき夜よ石濱づゝみ狐なくなり

古戦場

うきしづむあたもひとゝき石橋の山松が枝に秋かせがふく

名所春雨

かはらやく烟の末もうちしめり今戸づゝみにはる雨がふる

残春

たちのこる霞もさびし墨田川はなよりのちのはるの夕ぐれ

春朝

二つ三つ霞がくれを飛ぶ雁のつばさに見ゆる朝ごちもなし

海邊霞

いろちかくかゝる干潟の舟かげを立ちへだてたる朝霞かな

春雨

月影もつま戸にまめるこゝちして雨になりぬる朧夜のそら

霞

雲間よりほしもちりくるこゝちして松の木陰をもる霞かな

春夕

白魚とるあまがしわざも見てゆかん月おもしろく霞む夕暮

四月十日母君の靈祭して 春懷舊

うちつれて遊ぶきゝすの聲きけば親ある身こそ羨ましけれ

梅

なかくに聞もる風も嬉しきはたゞかりそめの梅の下ぶし

春眠

夢ぢとふうめがかならでうたゝねの枕にさはる春風もあし

春雨

夕ぐれのならひにまして柳原けむるとみれば春さめづふる

閨怨

消えのこるまどの火影も寒き夜に遠方人の寐ざめをぞ思ふ

梅

はしゐして琴とる人の面影もおぼろに見えて梅かをるなり

夕春雨

山ばたの麥生えめりてゆふひぱりおちくる空に春雨のふる

遠山霞

武藏野の霞のまよりながむればおもかげのこる富士の遠山

蝶

柳原風うちねむるはるの日にいそがはしくもとぶ胡蝶かな

雲雀

風たえて花ぐもりせし大空にあがるひばりの聲ばかりして

浅草公園に遊びて

つらねゆく木陰の袖もいろそへて春風にはふ花のおくやま
靖國神社の花を見て

なき靈も身にくらべてやをしむらん嵐にたぐふ花のしら雪

四月廿五日朝のはど天氣よし

ちらぬまと風よりさきにいそぐらん花見車の音しきるなり

春のくれがた

散りはてし花のあととふ夕月のみどりに霞む影もしづけし

落花

朝寐ぶみけづる少女が袖の上に降りかゝりたる花のしら雪

相撲といふことを人のよめといふに

思ひきやかたんまけじのたゆたひよ揚る扇のよそならんとは

遠帆

浮きしづむいり日の空にたゞよひて帆影あやふき遠の海原

春遊

ともし火の花も吹き散る春風にゆきをめぐらす舞姫のそで

遅日

くれはてゝ思へば遠し岡づたひわけつくしたる花の面かけ

夏のはじめ向嶋を散歩して

かけ捨てし青葉がくれの篠すだれ風より外にまく人もなし

海棠

海棠の花のねがほもさめにけり露うちこぼす蝶の羽かせに

蛙

しめやかに池の蛙もなきいでゝ雨れもしろき夕ぐれのやど

首夏

やり水に龜もて遊ぶうなる子の袖わたらしく夏は來にけり

薄暮

星はまだ光れちこぬ松陰にはのめきいでまはたる飛ぶなり

水聲

えだかいす杉より奥は道もなしかすかに水の音ばかりして

撫子

あでしこの花の朝がほ露おもし戀しき人のおもかげにして

水邊夏

風渡るはすの若葉のひまどめてうかぶもすとし夏山のかげ

神保町より飯田町の家にうつりすみける頃六月
ばかり

さながらに身さへかへたる心地して松の上ゆく月を見る哉

おなじ月の廿九日つまの兄をうしなひてなげき
にしづみをるに

さらでだにはす隙もなき五月雨の習ひに勝る袖をこそ思へ
忘れていあすもあいつと起臥の身に面影のはなれざるらん

初秋風

つりどのにあさづ釣り遊ぶうなる子の袂に見ゆる秋の初風

夏虫

浮草につばさやすむるかげろふの夢より秋の風やたつらん

盆まつりするとして

なきたまのかりねの枕露ちりてむかしに似たる秋風ぞふく

水鶏

みづたでの下葉浪こす夕風にかはしも遠くくひなくなると

美人

ふちかゝる髪のひまより匂ふなりまだゑみあへぬ花の朝顔
手枕のなごりあからむかほばせにこぼれてにはほふ春の朝髪

水邊星

たつさぎのあともにごらぬ澤水にうかべる玉や夕づゝの影

曉星

山のはの星はすくなくなりけり尾上の鐘を數へつるまに

水風夜涼

涼みすといでつる舟の苦楚うちねほふまでかせふけにけり

あつき日かひ猫のいとよく眠りをるを見て

すゝささく春の夢ち遊ぶらん心地よげにもねむる猫かな

蝸

松風はまだかどたてぬ日影より窓におちくるひぐらしの聲

舟人の夢はさめゆく蘆かげに夕日うすれてひぐらしのなく

枕

旅人はまくらさだめんかたもなし峰の松かけ谷のかやはら

そらにたつ波の枕とたかくして影うちねむるあけがたの月

つまの兄君の四十九日にわれも謠を習はまほし

など常にいはれつるをおもひいでよ

諸共にうたはん君とたのみしをよそに隔つるけふの悲しさ

いもうどのまづをの身まかりぬといふ電信きた

りける時

おもほえぬことゝのまらせに泪よりまづ亂るゝは心なりけり

きのふこそつまも兄君をうしなひしか今日また
かゝることよとおもへばつまに

きのふかも君がぬぎつる藤衣身にさんものと思ひかけきや
またの日

世の中のおくを先だつことわりを見せても散るか森の下露
初雁

波の上に雁は來にけり藻塩焼く浦わの海人も秋や知るらん
梟

むかしたがすみし家居のあとならんあるじがほなる梟の聲
野露

うなる子が花をる顔もぬれにけり垣ねつゝきの野邊の朝露
橋

たつた姫けさ渡りつるあとならんみそらにかゝる霧の浮橋
秋夕

ひと時雨すぎつるまゝにくれにけり夕日みじかき冬の山里
秋寒さかた山里の夕ぐれにまたおとづれてゆくしぐれかな

秋風
山もとの火影あらはになりにけり稻葉をわたるよひの秋風

秋田
をぢがもる山田の引板におとづれて色ある風の渡る頃かち

秋獸
寺もりもつきにあくふれいでつらん御堂の廊に狐なくなり

秋螢
秋風にふきよせられてはなれすの蘆間とひとつゆく螢かな

秋色

なにどなく秋のけしきになりけり薄はなだなる夕暮の空

秋晴

はれわたるみそらの末に冬ちかき色をみせたる富士の遠山

秋木

山雀のいつくひ行きし種ならん松のやどり木紅葉しにけり
晴れてゆくふもとの霧の波間より浮びいでたる松の村だち

残月

まきみつむ山路をぐらき明ぼのに猶影のこすいりがたの月

薄

をれかへり招く垣はのいと薄たがよの秋のなごりなるらん

霧

山寺の垣根は霧になりけり花つむちどのみちまよふまで

朝露

このあさけをりこし柴にいろ見えて氷り初めたる月の下露

秋田家

あれはてし畔のやしろもとよとしの祭にもれぬ秋を樂しき

名所秋

一夜ねてきくだにあるををしかなくさがのゝ奥の明方の空

海邊望

雪どちり霧とくだけてたつ波にはれてはくもるをちの嶋山

社頭紅葉

神もさは心や千々にたぐふらん紅葉まがらむみたらしの水

月透簾

玉すだれひまもる月にむび人も小琴のちりやうち拂ふらん

閑庭萩

いづかたに人はすむらん故郷はをぎふく風の音ばかりして

山里をとふ

人影はゆくへもまらず心あての琴のまらべを松にのこして

名所原

雲さわぐあなたや白くなりぬらん時雨身にしむ武藏野の原

樵夫歸月

眺めやるふもとは月になりにけり柴おひつれて山ち急がん

家よ月ごろかひならしつる猫の子いづちゆきけ

んかへらずして一日二夜になりぬ犬にやはまれ

けんわるものにやさらはれけんといとあはれに

もかなしくもおもひつとけられて

朝夕に馴れつる物をゆくへなくはふらかしたるけふの悲しさ

いつのまに歸りきぬると手にとれば夢なりけりな鈴の響は

人ならば道をとひても歸らんをたふ膝のへにけさは馴るら

んかくて二日たちぬる朝ふとかへり來ぬうれし

ともうれし

今もなほ夢かと思ふ二夜見しそのおもかげの心ならひに

のちまたかへらずなりける頃妻の妹より首玉の

料に紅のひもをぬひておこせければ

ぬひてよと君に頼みし昨日まで形見になさん物としりきや

二日三日たてどもおとづれなしこのたびのいた

づらにみなしてんことよと思ふにいとかなし

いかなればかく陸びては馴れつらん契悲しき猫にもあるかな
五日六日にもなりぬはやかへらぬものにみきし
つればあはれとよのつねなり

今どまゐる手がひのねこをうしちひて子に後れたる親の心を

冬 曙

あけはてばをちのたかねの雪を見ん曉寒くしぐれふるなり

冬 夕

すぎゆきしまぐれのあとに残る日の影ものすどき峰の老松

冬 雨

柴ひろふ山ぢもぬえて谷陰のいはりわびしき冬のあめかな

冬 鳥

よびかはす田鶴の遠音もあはをなり雪かきくらす夕暮の空

冬 獸

少女子がひぎの上さらぬ猫の子も同じ心にはるやまつらん

冬 木

秋姫の手お里にもれし松がえにたれくりかけし雪の白いと

冬 日

朝霜にうづもれはてし庭のおもを芝生にかへす日の力かな

冬 水

霜がれの草のなかゆくいさゝ水朝日にけむるいろも寒けし

蘆の花ふさちる風に波たちてこぼらぬかたも寒けかまけり

冬 月

くまもなくふけわたるこそ淋しけれ落葉の後の霜の上の月

十一月廿三日飛鳥山のもみぢ見にゆきけるに道

までおひ來つる時雨のあともみぬざりしかば
木陰には我こそさきにとひきつれ時雨と共に家はいでしを
とて酒のむほせにふりいでぬ

この頃の空とえるくわびしきは紅葉しぐるく木々の下陰
そのこのす枝に恵の村時雨よのまにふらば嬉しからましを
東京大學のたかどのより富士の山さはる影なく
みわたさるゝを日毎に我出仕する編輯所の窓よ
りうちむかふにさまくにかはるけしきもおも
しろければ

そのかみのおもかげ見せて今もなほ烟にまがふみねの白雲
富士のねは戀しき人に似たるかな影みせそめて又隠れつゝ
くもりなき日影にはちて山姫は霞のたもとうちかざしけん

簑とれはひ笠とかづきて旅姿くもによそほふ富士のたか山
富士の嶺は神代の雪のけぬが上に幾積りして年はへにけん
富士の嶺のはだへは残る色もなしきつるやいくへ雪の毛衣
旅人をおなじ高嶺にあふぶせて雪うちはるゝあづまぢの空

枯野

朝月夜しかのふしどもあらはれて枯野の尾花霜にふすなり

旅泊

夜もすがら波にゆられてかぢ枕さしいる月の影もさだめす
うき沈み波よまたがふ帆ばしらの月影高く夜は更けにけり

氷

里の子がうつや川瀬の石つぶてまろがる見まば氷しにけり

冬椿

鶺鴒なく山ふところの夕日影春めくえだにつばきさくなり

五年ばかりさきになかくやどりてありける家の

あたりをすくるとて秋のくれがたに

今はたが文よむ窓をたゞくらん軒ばのいてふ風にちるなり

水鳥

池水をかくす落葉の風の上になきすたづねて鴨ぞなくなる

橋渡る子らにもなれて日影よき池のをし鳥たちもさわかず

社

三輪の山むかしながらの杉お枝にかゝれる月や神の面かけ

青山元をとひける夜家づとに前栽の花を乞ひけ

れば下男どもよびいでゝその枝この枝と蠟燭も

ちなぶらいひつくるをみて

菊はさかり椿はつばみどりぐに花も姿をかへてこそみめ

冬眺望

木がらしのふき残したる松一木けむりて月の影ふけにけり

名所雪

すみだ川水上遠くゆきはれて夕日をかへすをつくばのやま

歳の暮の心を人々の境界になりてよめる

少女

鞠もぬつ春の小袖もぬいをへつあすまつ外に楽しみそなき

書生

たらちねの贈りしまゝの旅衣ほころびながら年もくれけり

老人

明暮につまぐる數珠の糸たぬて残り少なくなれるとしかな

商人

をしと思ふいとまもあらじ西東あしをそらなる年のいち人

貴人

九重にとしのよごともまをしきぬ心えづかに春やまたまし

貧家

ふる雪の綿にもがなや妻に子に寒からずだに年をこさせん

法師

墨染のそでも市路にまじるなり春のたむけの花かはんとて

茶道をむねとする人の八十の賀に

くみいるゝ釜のまみづもまらぶらん君が千とせの松風の聲

ゆく年の巻 明治十九年詠草

一月一日の朝

ゆく年を送りしかめの酒ながら心あらたにゑへるけふかな

新年朝

待ちつけて向ふむづきの朝空に翅をのべて田鶴どなくなる

舞

散れば舞ひまへばこぼれて舞姫のすぶたにならふ花のしら雪

冬旅

わびしさを語りあふこそ楽しけむわが越ゆるし雪の山道

山残雪

舞ふつるのつばさにかくれあらはれて一峯しろき春の遠山

走女

一花をたれに見せんとをみなべし霜より後に水かゞみする

盃

花の色にかすみもゑひぬさは姫いつきの盃そらにさすらん

夕霞

かへり見るつゝみの日影霞むなりなごりさびしき花の夕暮

春曉月

柴人のあかつきおきの袖の上に花のかげれとす山のはの月

名所松

天少女けふもかりゐてまらぶらん琴のねおくる三保の浦風

風前落花

寒からぬ雪ふき入れて川舟のすだれにそよぐ花のまたかせ

首夏月

藤のはなこぼるゝ水を吹く風に晴れ曇りする月もまづけし

蚕

桑の葉をこにかふ宿の明暮ハ晴れてもあめの音ばかりして

夏花

五月雨のはれ間に見ればかきやりし池の浮草花さきにけり

湊雨

舟人のともよぶこゑもあはれなり湊入江のあめのゆふぐれ

水邊郭公

水車ひゞきもたねてふくる夜の小川の月になくほととぎす

瀬をはやみ月もくだくる谷川に一こゑまじる山ほととぎす

雲

筆取りて畫がきし人の影もなし
いり日のあとの雲の山の端
龍と臥し虎とをどりてたつ雲もかへれば
峰の花のおもかけ

螢

山川に流れかゝれるふる卒都婆照して
一つとふほたるかな

述懐

思ふ事ならぬといひてなげかじよ
思はぬ事のは多きに

橋納涼

夕風いわれよりさきよわたりけり
ささ波こゆる谷の板ばし
暑さをばいくへの底に忘まきて雲の上
ふむ木曾のかけはし

樂未央

幾夜ねて千里のほかの月を見んけ
ふずはなるる日の本の海
明くるまで月にのまんとれもふまに瓢も
たせて友も來にけり

小幡八重子のはつらぶやをいはひて
きぬなごか
くりつかはすとて

山家暮秋

またれつるたづの一聲きしより空の心も
はれわたるらん
散りまがふ紅葉のおくに残さるる山里
さびしあきの夕ぐせ
つとみ

水邊秋風

月ならでさく人もなき海づらに波のつと
みの聲ぞふけゆく
うすせゆく波の日影をかたよせてひと
すぢわたる秋の夕風

菊

うちあそぶ鞠のゆくへも心せよ學びの
まごの菊咲きにけり
水邊落葉

散り來てはまた流れゆくもみち葉に汀の夕日浮ぶ間もなし

旅 曉

霜の上にまだたび人の跡もあし月とふたりの山と江のみち

海邊冬月

いかづちの聲はえづまる波の上にもるがほ寒けく浮ぶ月かな

美しきもの

鳥もまだけさは跡つけぬ霜の上にこぼれて匂ふ山茶花の花

水邊寒月

木枯に落葉かたよる池水をさむげにのぞくつきのかげかな

冬 鳥

いく度か時雨をさるふ山風にこすゑのからす夢もつゞかず

ちごのもて遊びものいると箱のふたに

ふく風にまかせてめぐる風車かひたつ末のをしへともみよ

氷

やり水にかけしうなるの水車めぐらすなりて冬ふけにけり

霞

くち残る池の紅葉にまろびては波に消ぬゆく玉あられかな

冬 夕

雲間もるほしの光も身よぞまむ晴れゆく雪の夕ぐれのそら

車

風車ひとりひまなくめぐるなりねむりまづけさちごの枕に

いつのまにのり習ひけん物學ぶ外にひとつの竹うまのまぢ

冬花

谷深くしぐれの雲よおくられて歸りざきする花を見るかな

雪中眺望

うづもれぬ煙ばかりを都にて雪にとまりのをちの富士の嶺

初春

まだ寒き朝日の影も何となくかすむや春のまるしなるらん

夕陽

こがね色のたつを波路にをどらせて夕日ちかづく遠の嶋山

寒樹

おほかみのほゆるやいづこ冬枯の林にすぐく月がさぬゆく

山

おもしろや烟のかむり雲のおびいつもよそほふ那須の高山

川

水飲みにおりくる鹿の影みぬて谷川しろくきり晴れまけり

蜂

吸ひさしてけさわかれつる花もなし風ころ蜂の恨なりけき

水邊若草

ながれよる蘆のふる根をよすがにてひとむら青む春の若草

母君の靈祭まける日

父母のひざにたはるゝ嬰兒を見るにつけても君をしる思ふ

君まつるやどのこずゑに鶯も春のまらべをたむけてやなく

四月八日池の端より上野を見やりて

おもかげの外に花のいろもなし春雨かすむ夕ぐれのそら

雲雀

うちかすむ野寺の塔のそら高く思ひわがりてちかく雲雀かな

村夜

旅人をのせこしうまもまじるなり月おぼろなる村の細みち

朝歸雁

紅の雲につばさをかすませてあさぐらたかく雁歸るなり

水邊花

水しろくきしみどりなるたにかげを春になしたる山櫻かな

猿

奥山にこのみひろひし猿の子を誰教へてか舞はせそめけん

六月のはじめ市谷のおくの家にうつりて

歸て来てむかふ垣根の花茨るみてぞことばかはしがはなる

夏草の葉に置く露もわがものと思へば玉のこゝちのみして

なべてさく花のいろかも我宿に見る時ばかり楽しきいなし

相摸の旅よりかへりける夜

三崎がた波こぎわたるつり舟のなほ浮きしづむ手枕のゆめ

兵士

故郷の親子のかほも忘れけりいくさのにはのかちどきの聲

水邊夏

咲きかゝる池の晝顔靡かせてまこもがくれに魚のひれふる

木曾路の日記の中に

おもかげにあすのまのばんわぎも子が宿の垣根の朝顔の花

嬰兒もちよのゆくへや慕ふらんろの面影の見ゆる夜半かな

くちつもるかばねにおひしたねならん川中嶋の秋草の花
谷川の音より外に友もなしやまた山のあけくれのそら
いづかたをなつこのけん木曾の山桔梗さく野に鶯のなく
花のなき草葉もぬれて夕立の雨かうばしき木曾のやまみち
村雨の木々うつ音も神さびて夕ぐれすぎき木曾のやまごゑ
馬籠峠をこゑはてける朝

あすよりの誰をふくらん朝夕のたもとになれし木曾の山風
九年へて母君の御墓にまうづ

何事をまづまうさんと膝をれば聲なき木の葉袖にこぼるゝ
をとどしうせける妹のはかをはじめてとふ

いつしかと待たれし兄の歸りしをもの言ひたげの石の姿や
君がためなかん物とい昨日まで思はざりしをあはれ世の中

寒 燈

見し夢の花のいろかもうつるなり霞ふる夜のともし火の影

旅衣の巻 明治廿一年詠草

三月の末つかた安房の旅しけるをはりに北條に
やどりてそこより富山に登るまちにて

旅衣ぬれとほりてもたのしき春雨けむる小田のほそみち
山に花もあまたほころびたり

山がつけがけさまだわけぬ谷陰に獨りほゝゑむ花を見るかな
よそめに道もなかりし高山に登ればやすむ陰のありけり

やどりに歸りてあすの家にとおもへば

夢にのみ通ひなれたる我宿もこよひばかりになれる旅かな
あすの夜の千里のよそとなりぬべし枕よ通ふうら波のこゑ

夏花

川せみのすぎにしかたに風すぎて汀のひしの花なびくなり

夏月

風わたる青田のいねの波のうへを心まづかにわたる月かな

故郷松

松ひと木たてるを見れば故郷の野邊も昔のかけはありけり

山路

旅人のこゑおくれたる山みちに残る日影やつゆのもみぢ葉

夕立

うなる子がうかべし池の木の葉舟ゆくへあやふき夕立の雨

夏朝

身をやかん物ともえらす朝雲をいろどりそむる夏の日の影

川風

よきほどに波ふきたてうちりうかぶ花の上ゆくはるの川風

閑居夏

文車を風入るまどにひきすゑて夏の日ぐらしふみと遊ばん

森蟬

消ぬ残る日いまだあかき松が枝に涼しくかはる蟬の聲かな

田舎月

くれにけり豆の花さく山里のかきねまづかに月もやどりて

まづのめもいとくり車ひきやめて月に心のむかふ夜半かな

わがやとを高嶺の松の下かげにまばしかくして登る月かな

女郎花

をみなべし花さく頃何となき山下みづのいろもなつかし

秋田

神まつる里も見ぬけり秋風に稲穂たれふす小田のをちかた

鳥

夕風のふきかたよするもみぢばにみだれて一つゆく鳥かな

近きわたりをよる散歩して

わけゆけば稲葉の露もこぼれ来て月影かをる小田の細道

虫のねも遠く聞えていねの上を月おもしろくわたる宵かな

小兒の百日せきにてわづらひける頃

あはれさよ吐けば又飲み飲めば吐くちよと命のちどの起臥

我膝に頭もたせてうち眠るちどのおもむのかくも瘦せつる

さとしてもまださよとまらぬ嬰兒に薬のまする親のくるしさ

なくやよき眠るやよきと様々に思ひみだるよおきふしの床

なきたてよはしがる物を與へ得ぬ父こそ先は悲しかりけれ

あほりなば菓子も木實もとらすべし今暫くを泣くな我子よ

昨日よりまみもたゆげに見ゆるかな昇れる熱や幾度あるらん

花園にむかふゑがははかはらねど今朝はふりたつ勢もなし

謠ひつと蝶とくるひて舞ふ様を一日も早く見んよしもおな

秋夕

黄ばみゆくいり日のあどの横雲に風の色さへ見ゆる秋かな

春雨

羽ふれて渡るつばめのあどの波消えぬと見れば春雨ぞふる

秋風にまかせはてたる月が庭はこぼるゝ種の數もさだめず
 陸前の松嶋に船遊びせし時
 罪なくて今日ころみつれ松嶋や小嶋にかゝるゆふあみの色
 世にたらぬ歎もあらじ浦のあまは波の入日を庭ようかめて
 かへる舟おれをしむかをちこちの松よ残れる夕波のこゑ

古城

いちごつむ子のあしがけとなりけり苔も幾重の城の石垣
 風ひとといくさの聲をまらぶなり月をあるじの城の高き
 病みつかれたるちごをつれて箱根にゆく
 みちにて

ちごの上に比べて予見る秋の雨にまをれて立てる花の笑顔を

箱根山わけいる袖におつるなり神のめぐみのまつの下つゆ
 かくばかり親も己が身を思ひけん子ゆゑに登る箱根路の空
 妻ははつたびなりけれ

もの毎にまだみもまらぬ旅の空けふこそ君が神代なりけれ
 箱根塔の澤の一の湯といふにやとりゐて

筆とりて雨さく外に事もあし妻子の寝たりもいざねん
 嬉しくも天地ひろくなりけりかやなき里のともし火の下
 れもしろや歌思ひつゝまるびふすまくらに落つる軒の山影
 あなたのしねむりうみさる枕には酒も残れりちごも笑へり
 雨雲を谷間のものとなしはてよとよさかのぼる天つ日の影
 湯あみしてうちふす窓のまづけさを音づれ顔に秋風ぞふく

大磯にて

箱根山くもゐる峰をあとにみてなみのおときく大磯のさと

片瀬にて

江の嶋のともし火青く暮れはてし片瀬におつる夜嵐のこゑ
七里が濱をすぎて鎌倉にかゝる
うちつれて鯛つる舟もかへるなり秋かせひろき鎌倉のうみ
をれかへる波をかすめてとぶ鳥の翼にさはる嶋かげもなし

暮 春

山窓のかへでの若葉あめみえて春さびしくもあれる頃かな

蝶

露のうへにうまれし蝶の影みえてかすみそめたる有明の月

星

軒ちかくなぶるゝ星の影青し寝ざめやいかになをちかたの空

樵 夫

こりためて背負ふ眞柴に雪白し酒あたゝめて姫や待つらん

秋 風

せきれいのかりゐる岩に秋ふけて川ぞひやあぎ夕風ふく

春 月

旅人もいそがぬ春の夕ぐれを月になしたる小夜のなかやま
あすこゑん木曾の山ぢの杉の上に霞みてかゝる春の夜の月

鐘

くれのこる紅葉のおくのふもと寺鐘も名残になれる秋かな

落花多

古寺の軒のやどり木はるふけてはらはぬ花の雪ふかゝる

苔

まださめぬ眠り寒けきふるづかの昔の衣にはるさめぞふる

秋朝

雁渡る朝日の前のくもの波まづおもしろし野にやくらさん

海月

荒波のいくへの底にまづみたる舟のあとふわけがたの月

露

山の井はちる露しげし水かゝみうつす少女の影もみだれて

雨後花

春雨のなごりのいろにてりかへす夕日うれしき峯のはつ花

雲雀

さかばやな春は野守に身をなしてかつる雲雀の夕暮のこゑ

磯波

磯寺のはかげ寒けくふくる夜にいはこす波の聲ばかりして

驛路春

旅人を山路はるかにかくり来て花あるやどにかすむ月かげ

春のうた

庭鳥のまづが軒ばにときつくる聲あたゝかに霞むそらかな

西川かめ子の北海道より文おこせたるか

へりごとのおくに

面影に君もそひつうかぶなりぬが千嶋の波のうへの月

露ながら花のひとねだ折りもちてたてるは君か窓の火影に

秋雨

あすさかん菊のつぼみもかすそひて雨たのもしき夕暮の庭

人の八十の賀に

君ならでそのゆく末いたれかみん庭の鶴龜のきのまつたけ

暮春鳥

たがためにきゝすの聲の残るらん花にまかれし夕ぐれの山

暮春水

山吹のるげもまばらになりにつけまぐまでいくかの庵の苔水

母君の靈祭しける日春風を

雪まよりまたりそめたる春風のこゝろを花の上に見るかな

なきたまの名残さびしきふまの上袖ふれてゆく花の春風

一日遊びくらししてかへりける又の夜

こよひまた誰どか見まし山寺の若葉さびしくかすむ月かけ

和歌山は長く逗留して人々のなさをうけぬた

るが高野山にのぼるにつけても途中の用意やど

るべき僧房の紹介なごさまとくに心をつくして

あたへられければ

けふまけん高野の奥の雲よりも深き人のなさをけなりけり

忘れじよ友のなさに送らせて旅立つけふのあけぼの空

高野山にて

雲に入る杉より上にひびくなりたかの奥のひぐらしの聲

男郎花あまた咲きいでたるに女郎花の一花

もこえず

女郎花にははぬ山のあき風にところえがほの花のいろかな

夜あけて霧ふかし

名もまらぬ花をちこちに見えそめて朝霧晴るゝてらの中道

和歌山にてのしはく、和歌の浦にしはあまにゆ

きけるがいつのをりにかありけん

又もこんかた葉の蘆のゆふ風にこゑうちそふるまつの下陰

隔てなき遊びがたきとなりよけり昨日のよその和歌の浦波

別をても夢路に通へいにしへのあとなつかしき和歌の浦波

鳴籠といふに遊びけるに夏ながら紅葉いさゝか

色づきたり

瀧の音に夏もすれて山寺の庭のもちばまだきそめけん

和歌山城にのぼりける時

まだそめぬ蔦の色さへあはれにて夏も身にしむまろの松風

日前國懸の両宮にまうで

鶯の聲そらにきこえて日の影も神さびきたるもりの竹むら

ゑか山にて人々あつめて歌の會しける夜

池といふ題を

池水にうかぶやなぎの一葉舟それだにとまる浦のありけり

また初秋雲を

秋風のまだ身に落ちぬ夕ぐれを空にいろどるみねのよこ雲

また初秋花を

まばしとて夏をのがれし山寺のかきねの月に萩を見るかあ

和歌山をいでたつに人々みちまでれくり

来て涙うかむるもあり

人々のふかきなさをまが袖にあつめて絞るあけぼのゝ道

すみなまをし方のかなたとみかへれば涙にかすむ和歌山の城
吉野山にやどる

来てみればまじるうき世のちりもなし吉野の山の夕暮の空
なほいかに花の雪ちる朧夜のそのしたかげの旅寝なりせば
西行庵といふあたりに苔しみづのあとあり

あぢ戀しこの苔水をむすびあげて筆ぬらしけんひとの面影
後醍醐天皇の陵の如意輪寺の奥にあり

古寺のかけひのしみづおとすみてみささきさむし秋の初風
櫻の葉をつとみて妻のもとへ

面影にあらしの色をおもひやれ筆もおよばぬみよしの山
また人のもとへ

夢にだにこよひのかよへ吉野山木の間の月に語りあかさん

多武峯さしゆくみちにて夕立にあふ

あきづとぶみちのなでして露みぬて名残しづけき夕立の雨
長谷寺にまうづ

わが身さへ佛さびてもみゆるかなまつ風かをる長谷の古寺
いつかはと思ひ渡りし初瀬山登るもしるべ世々のことばの

三輪の神社を拜む
面影の夢もこよひのかはるべしけふをわけつる三輪の杉村

畝傍山の東南の陵にまうでよ
御とらしになれししらべか玉だすきうねびの山の松風の聲

奈良にやどる月清し
もろこしに昔の人のながめけんこれや三笠の山のはのつき

元明元正ふたみよのみささきにて

もよしきにつづくゆめぢの跡もなし稻葉を渡るあはの山風

聖武天皇のみささぎにて

佐保の山くさばしづけし古寺のかねに千年のこゑを殘して

よしのをいでしより木津につきける日ま

で日毎に夕立にあへるもうれし

山めぐりわがゆくかたに慕ひ來てしたしくありぬ夕立の雨

木津の龜岡氏に宿りしに酒いたくしひられて

わけきつるあどを都になしてみん夢ふされくれ木津の川風

ことより京都の空いさはりなく見ゆ

あすのこが袂の雨となりぬべしあたどのまねの夕ぐれの雲

また

うちむかふ故郷人のおもかげをこそらにゑがく雲の色かな

みかへれば三笠山もいとちかし

三笠山月にむかしのあともへばあらしにひやく古寺のかね

大原の寂光院にて

御幸せしおぼろのしみづ影たえて咲き散る花の春やいく春

三條の家にやどりけるに三階なればとこ

たされぬ所もなし

東山ともし火あをくまたよきてまくらになるよ加茂の川風

四條のすゞみよりかへるく

燈火の影をはなれて休らへば比叡のねおろし袖に吹くなり

あらし山にて

大井川たえしとゆきのあと問へば聲せぬ波にまつ風ぞ吹く

いく人の花にいとひし末ならんつゆふきおとす嵯峨の山風

片折戸鎖し捨てたるあともあしいづくの松かしらべ傳へし

ほととぎすといふ茶屋にて酒のミたるは

邊に雨ふりく

あらし山つきぬ名残をおくるとや雨に姿をかへてたつらん

ぬれながら野の宮にまうづ

我のみと思ひしものを野の宮の黒木のとりぬる雨もとひけり

東山の大文字火ともす夜にあへるもうせし

世の中のすがたを見せて山のはよたがかきそめしもこの燈

攝津の住吉にまうづ

我ためいねぎごともせし神よたゞ汀の松を千代にからすな

家人にいつかきかせんすよしの松にまらぶる神風のこゑ

大坂をたつまへの日明石氏にまねかれて

櫻の宮よすゝみよゆく

蓮かをる櫻のミヤのゆふ風も雪井のよそにあすのしのばん

十一年あはざりし堀江のをば君をとひて大坂に

てまよえまゐらすまことに包が母上の御はらか

らは九人もおはせしを今いたゞこの君ひとり

かりたまへるもかあしきにつけてあつかしうも

のがたりし給ふあを夢のやうなり

十年へて君にあひ見し嬉しさを歸りてつげん母のおはさば

母上の病ませ給ひしはきのふとおもひしをとて

そのをりのことなどかたりいで給ひければ

ともし火もなみだをそへてあき君の昔語をこよひ聞くらん

岐阜にやどりて長良川の鵜飼をさる

あすまでのあゆの命も隣れなり波に消えゆくかゞり火の影

家づとにもてこし住吉人形を飯田大人に

かくりまぬらするとて

住みなれし松の木影を立ちいでとひよる千代の宿の此宿

和歌山の大水にて家なぶれ人おぼれなとせし事

おびたゞしといへばいそぎそのあたりの人々と

ぶらふとて

きのふまで心ゆるして涼み舟うかべしものを且かの川みづ

人と向嶋の秋草見に行きける歸るさに

又いつか君とながめんすまだ川ミなかミけむる夕暮のあめ

九日はもちの夜に當れり一家をあつめて歌よま

んと題さぐりなとしたりと心なき桂男の顔見せ
んともせずしてやミぬ

月やいづこみぶとぬ玉の心地してすゞきをつたふ雨の下露

山家月

里人がいたゞく柴やおくるらんおほ原山のありあけのつき

河月

大井川やさる月こそしづかなれかめのを山にまくら定めて

武田みつぎ子のはじめて子をえつるまもなく失

なひけるをとぶらふとて

身ひとつに秋のあはれや集むらん露をみしよの面影にして
くらべみよあはれゆふべの一嵐さきあへぬ花の色も残さず

九月十一日の夜の一夜あれあかして又の日の夕

方に至りて全くしづまりぬ雲の色星の影心地よ

き秋の景色になりけり
日ぐらしもきのふの陰やたづぬらん野分のあとの夕暮の庭
根ながらの花のゆくへもあはれなり野分のあとの夕暮の庭

此頃儉約玉と名づけて金たくはふる土器の世に
行なへるゝを家のものどもに分ちつゝそれ
に書きつけける

かきあつめかきあつめなば高砂の松の落葉も山とならまし
火にたかば賤が夜寒を凌ぐべし拂ひなすてそ庭のもこち葉
末つひにそのまゝにてや止みぬべき谷の小川も峰の小松も

秋風

柴おひてかへる谷まの丸木ばしまもみえそめて秋風ぞふく

秋夕

鹿の聲たゞこゝもどの心地してゆふ日にちかき秋の山のは

秋田

ふもと田のあきおもしろし神山の祭のつゞみ聲もどろよ

秋山家

水車紅葉のをちにひぐなりこのみなかみやたづねこし宿

秋山寺

御あかしは月にまかせて苔みづをやがてあか井の秋の古寺

秋水

これも又ゆたけき秋のこゑならし月にすみゆく小田の落水

秋花

信濃路やかた山そばの花のうへに夕風しろく秋ふけにけり

秋鳥

八幡山めぐみにもれぬ秋なれやおほざら廣くむれわたる鳥

秋獸

もみぢ葉をかたしきをれば熊野路や枕動かすおほかみの聲

秋旅

急がずはくれん山ぢの麓寺こゝのもみぢも過ぎうかりけり

秋朝

萩の花ちりしく庭の朝じめりをしかの跡のまじらましかば

人のもとに

今もなほおもへば戀し七草の花さくやどのゆふぐれのいろ

今年の夏必ずよ來ませ行かんと契りあひたる言
の葉いかれずながらいさゝかの事のゆき違ひよ

りもとの心をえはたさでむれい京都より直に歸
ることとなりぬその人い丹後の瀬田しげ子にて
夏の休みに歸郷したればなりかくて休みもはて
歸り來ぬるすなわち幾度もとひ來てそのねんど
ろに待ちまうけたるさまを述べつゝかくまで
人の心を勞せしめ給ひしとて言葉にふみに恨ま
るゝも今更ことむりにてかつい面目なけれどい
かゝいせんされどあやにくとひ來る日いつも
留守にてえあいでのみ過ぎつるに十月十七日
とまあるをりにとひ來たればのどかゝ物語して
互の心にくまものこさずなりぬるこそうせしけ
れさて歸りてのちいひやる

むつましくあひて語れば夢ぞかし君恨みけん
くらべみよ短かく過ぎし夢よりもまだみぬ里の
あすの面影

ある夜空晴れたり

秋風やはしの光をみぶくらんつゆとしもとの
中ぞらにして

十月の末市谷より小石川に家をうつしけるが
お

のれの例の學校にいで十一時までをしへてま

だ人々のあるならんともとの家にかへりて見れ

ばはや門もどざしすてゝ移れるよしのはり紙を

残せり何となうあいにて

けさまでもすがりなれたるなか柱ぬし戀しげに
秋風ぞふく

送られてけさはいでつる我宿をたち歸りみれば
あはれ故郷

又すまん人のなさけにかゝれかしほりのこされし
庭の秋草

朝落葉

朝葉つみ歸る少女のそばづたひ猶捨て難く散る
木の葉かな

夜時雨

衣うつ宿のともし火うちあびきひとむら時雨松に
ふるなり

名所紅葉

竜田彦あきの御けしや急ぐらん夜のまの露をお
り姫にして

初冬雨

集めこし夕べの木の葉火にたきて藁屋の軒の雨を
聞くかな

小山田に落穂ついでむ村鳥のゆくへしぐれて冬
の來にけり

風前冬月

しぐれくる木の葉の雨のひま毎に笛の音凄く月
ふけにけり

夕眺望

夕霧に見ゆる限いつままれてまづそでぬるゝあすの山どえ

橋霜

藤かづら結びすてたる橋の上に木の葉をどちておける夕霜
十一月廿二日赤坂離宮の御苑の菊を拜観して

わがそでにかゝらんものと思ひきや雲井の庭の菊の上の露

花のさまいろくにて目もあやなり

翁とてむびやはをらんと舞ひいでし姿もまじるゆきの白菊

あしたづの翅かはして群れゐるは八千代捧げし歸さなるらん

なほ奥ふかくいるまゝに

わたりこしそれや紅葉のはしならん星の林に我は來にけり
薄くこき梢の秋をどりくゝに捨てじと君やみそあひすらん

井

もみぢ葉をかきわけ見まば山の井の底にも月の影を殘れる

朽ちのこる柳をやびて井筒にて水にことたる水かけのいほ

わが女生徒のものしける廿七番歌合を判

しをはりておくに

秋の野の萩をみなべしいづかたに心よせてか露のわくらん

冬山

南より梅さくまどに雪ながらまたしくむかふゆふぐれの山

冬野

女郎花さく夕ぐれの月かけにうづらきゝしも此野なりしを

冬川

氷りぬしもまぢを瀬々にあそばせて朝日にけむる里川の水

冬里

新嘗のまつりいはるぬやともあし冬あたゝかにかすむ村里

冬 寺

おのづから霜にひくもあはれなり秋はむかしの古寺の鐘

冬 獸

わけまよふ雪の山路の夕まぐれ子を思ふ熊の聲もきこえて

冬 鳥

いかばかり今朝は木の葉の積りけん軒ふむ鳥の音も聞えず

冬 旅

ふるさとの火影にきかばさはいかに霜ふむ山の木枯のこゑ

冬 花

木のめつむ春の宇治人ゑるやいかに花おもしろき霜枯の山

冬 眺望

やせはてゝ今は見るべき影もなしこれや若葉の夏の山のは

閑居落葉

うなる子が雀網はる柴の戸にまづ聲たてゝ散る木の葉かな
松さむく残れる山をとまてにてあめに落葉を聞く夕べかな

冬 暖

里川や氷ながるゝ岩かげにねむれるさぎのゆめもまづけし
おち葉やく烟のすゑの寺山にはなを手向くる嫗もありけり

鹿

ものたらぬすみか人と人やおもふらん月面白く鹿の鳴く夜を
椎の實のこぼるゝ廊にあとつけて鹿のみなるゝみねの古寺

紅葉

みしめひく森の宿り木秋ふけて神代ながらの紅葉しにけり

鷺のゐるいはほかすめてふく風に谷陰くらくちる紅葉かな

朝

朝風にたもと吹かせて露ふめば今おきかへる花もありけり
世の中をかかても常にわたらばや朝びらぎする舟歌のこゑ

冬月

谷陰のいはまのつらうつたひゆく月にはひよく山彦もなし

はじめてゆやの能をせし時それに用ひた

る短冊に書きつけくる

あづまぢにいそぐたびねの草枕ぬれてもはるゝわが心かな

十二月廿四日鈴木まる子がしばしとて福

嶋に歸國するに

朝しものときぬさきにといろがすは雪にやならん白川の關

霜

さながらに夕月寒く暮れにけりわがふみろめし野路の朝霜

歳暮祝

うづみ火にゑがほあつめて一年の夢がたりする夕暮のやど

三十一日の夜にもなりぬ一年の面影一つ

のむねにあつまる

春風に袂ふかせてかまくらのむかしとひしもあはれひと夢
梨のはなこぼるゝ水に鏡して歌おもひしもあはれひとゆめ
菜種さく畑づたひしてちごと目ぶ土筆摘みしもあはれ一夢
わか葉さす細谷川のおぼろ夜に蛙聞きしもあはれひとゆめ
和歌の浦の波にあつさをあらはせて貝拾ひしもあはれ一夢
まくらふく高野のれくの夜嵐を友となせしもあはれひと夢

春日山みどろ寒けき神垣にかの子よびしもあはれひとゆめ
ひぐらしの外に聲あきみささきの岡めぐりしもあはれひと夢
谷水の音をいのちに大原のやまぶみせしもあはれひとゆめ
かあしさは心に残る影もなしたゞ世の中はあはれひとゆめ
こんとしもたゞ楽しみて世をばへん花よ紅葉よあはれ一夢
神よなほさまさすなぶら守らなん舞ふも歌ふもあはれ一夢

さかづきの巻

明治二十三年詠草

一月一日の朝

へだてなき影をつせへて盃にむかふころの神もまゐるらん

身にふれて昨日忘れぬ人もあらしちよをまらぶる門の松風

天の橋立の松もて作れるしとりは大森さ

が子のこへるよ

橋立の松にまらぶる春風をたもとにしめていつかあそばん

父君かへらぬ旅にいでたゞせ給ひける日

かゝらんと兼てしりせば何事も告おかましを聞おかましを

御心にたがひがちにてすごしつるこの年月をたれに恨みん

かくいふの一月五日なりその夜の御通夜

つかう奉りて

枕べのともし火青くまたゝきて今も我名を召すかとぞ思ふ

六日のあすの御はうむりの用意なごにて

ひまもなし

昨日までよべば答へしわが父の御名を旗手に見るぞ悲しき

七日御おくりつかう奉りはて

つかふべき子らもなき野に只獨なれぬ夜床や今宵しむらん

八日御墓まうでして水などたむけつ

ひさどとる手もふるはれて柳葉の影にしげくもちる涙かな

九日人々よりのおくりものを御霊の前に

れきならぶるとて

人々のなさけを君に手向けてもゑます御顔を見んよしもなし

十日故郷なる妹の許へ消息するおくに

おとづををきくらん人の心まで思ひやられてぬる袖かな

十一日

日の影もありしにかはるけしきかお親に別れしこの頃の空

鼓をうたせ給ひし御面影など思ひ出で

たえくにつまみの聲を傳へ来て夢ぢの末に夜風ふくなり

十二日渥美ちよ子などのおくりける花の

えだを御前にさすとて

梅の花にはふ木影の常ならばつまみの聲もきかましものを

十三日御墓にて

此岡の松ふく風も昨日までよそのあはれと聞きつるものを

十四日

何事のありともしらぬをさか子の唯人まねにをがむ悲しさ

十七日御墓まうでせんとて市谷の堀のあ

たりをゆく

親と子の別れもまらで水鳥の夢あたゝかにはるやまつらん

ゆふ子の母のおほせとて袂よりものとり
いだして御まへにたむけよれば

おほぢにとちごのもてこし菓物もはては嵐に散りや失せなん
おもへばおもふまに

さめ果てし夢の浮世に夢ならで残る御墓を見る予さびしき
廿一日御墓まうでして

くみかふる手向の水の薄氷日影まつまの世にこそありけを
しるしあまたさてる中をゆくどて

まだきよも親しくなりぬ此石の數に入るべき我身と思へば
廿四日も

日にそへて神さびゆくもあはれなりみはかを渡る夕風の聲
廿六日もまうでよかへるさに見をば梅を

りさしたる馬車もありけり

世の人の梅見る頃になりぬらしわぶ身ひとつに冬を残して

夕暮がた鳥のむれわたるをゆふ子のあれ

よくといひければ

よびかはし寝にゆく鳥の聲さけばかはらざりけり親と子の道

待雪

いつかわが軒ばの雪となりぬらんさえゆく月の末のうす雲

夕霞

見えそめし星もかくれて笛竹のこゑ面白くかすむそらかな

平田鈴吉のこへるある人の賀に寄石祝を

わしのすむ雲井遙にたつ岩のとはにと君をいはふけふかあ

里柳

うなる子が牛にみづかふ里川のつゝみの柳はるさめふる

早春雨

何となく野山のいろをおもはせて雪まの苔にはる雨ふる
埋火のあたりはなれてきゝそむる雨や深山の雪どけのら

暮山雲

あすの雨いづくのうでにつゝむらん花まつやまの夕暮の雲

二月廿三日は父君の五十日にあたれり御

まつりつかう奉るにつけても

せめてもの名残と思ひし神わざも今宵限になりけるかな

喪もはてつればあすのひげそらんと思ふよ

古の是もかたみとるからにしが顔ながら惜くもあるかな

春草

牛の子のまだ跡つけぬあをの草の色ころ春めきにけを
たち残るしろのいしすゑをせも猶春にはもれぬ草の色かな

古戦場霞

たゝかひのありし昔をとふ人も霞のそこになれるはるかな

春色浮水

菜種さく片山ぎしのいさゝ川草つむひとのかげも見えけり

窓雨

あまの湯の松の嵐にこゑそへてときとすぐるまどの村雨

月前霞

よひに見し花のこゑすやたづぬらん霞のうへをわたる月影

閑居

山風のひらきすてたる柴の戸を今宵も月にと入れけるかな

神のたゞわが里人や守るらんあをむ門田にはるさめぢふる

霞隔樹

稻荷山まつりのあとの杉の上になごりさびしくたつ霞かな

三月のすゑつかた小穴いち子が信濃にかへるに

北へゆく雁がなくなるあはれ君あすの家路の空にきくらん

伊豆めぐりせんとして三月十一日に家をい

でゝ小田原にとまる

旅枕定むる窓のをちかたにまづむかひるゝいづのねほしま

十二日石橋山の麓をすぐ

いにしへの石橋山をすぎゆけばむぎふみどりに春雨ぢふる

まなづるが崎ちかくみゆ

いづくよりおひくる敵ぞうち寄せてくだくる波にたぐふ響

は十五日馬にて八幡野などいふあたりとゆ

くけしきいとよま

春野やくけむりの末に駒とめて磯うつ波のこゑを聞くかな

赤澤山のみちにあたれり

ひばりなく赤澤山の山かげにやじりとぎけん昔をぢおもふ

十七日天城山をこゆ俄に寒し

春風はふもとにきえて天城山落葉にくものこゑぞすぎゆく

この旅行はまださきくまでもと思ひしをあの

赤澤山をくだるところにて馬よりわちて右の腕

をうちければ天城山こえてかへさにはおもむき

たるなりさればかた腕かなはで衣きることも箸
とることも不自由なるをいたる所のやどりの女
またはかどかきやうのものまでねんどろにいた
はりたすけてぬさせしかは旅としもおもはぬば
かりなりしうれしきことにこよひ修善寺のや
どりのこゝろふかよりしをおもへばいとたのも
し

椿さくかた山ざとを来て見れば神代ながらのはる風そふく

十八日沼津より瀛車よのりて箱根を遠く見つゝ

ゆくあはれかちよてこえんと思ひしものを

よそにみてけふやすぎなん箱根山たぬく霞む松のむら立

故郷なる妹のもとへふみやるついでにこの十四

日あき君の御百箇日にあたれば歌たむけてよな
どかきて

諸共よ祭のにはにつとふべきひとを千里のよそにのこして
春雨にぬせぬたもともぬれにけむかしかはる花の下蔭

京都の猪熊夏樹翁より この春もさすてやや

まん墨田川にはふ堤の花の盛をとて博覽會見に

もこまほしけれと今少しさだめがたしなといひ

おこされければ

大丈夫やむなしかるべきこの春ハ必ず來ませ花ちらぬまに

又 嵐山峯の櫻よ心あらば見にこん人をちら

てありまてといはるとに

世の中の心にかなふものならば我をあらしに君をすみだに

四月十二日神保のぶ子の母のいたづきとて俄に
讃岐に歸るに

物思ひある身いかになぶむらん霞む夕べのすまの浦なみ
朝春雨

あくがれし春の心を琴のうへにしづめて朝の雨をきくかな
春月幽

あま小舟別れしかたをみかへればさをうた近く月が霞める
子

月花を上なきものと思ひしの子もたぬ時のこゝろなりけり
董

故郷のこゝや昔の池ならんくぼめる野べにすみれさくくなり
竹

あなにくの竹の夜風や故郷のゆめ長かきといのりしものを
女郎花

風すさぶすゝきがくれの女郎花とふ人なくて秋やすぎなん
松風

たえつゞく波をつゞみのしらべにて琴の音おくる松の春風
古寺花

もりすてゝかねもひゞかね山寺の花にいそぐ夕暮もなし
水邊柳

わが父のわらい遊びにさしすてし川をひ柳はなかながるゝ
春夜

見し花の名残さびしき手枕に雨をきかせてふくる夜半かな
落花

うなる子よさでさしいきて掬はなん井關をくゞる花の白波

牧童

月にゆく牛かひわらはまてしばし我も交りて歌ひかへらん

尼寺

女郎花秋に遅れてさくのべのまれにをしかの跡もまじらず

曉雲雀

鐘のおともたぬし野寺の曉を春のひばりのしらせて予なく

曉庭落花

月にのみまかせやはてんにほひある雪白妙のわけがたの庭

山家桃

山里の垣根の桃の花のうへに落つるゆふひも春のいそがず

橋邊山吹

みどり子が鯉よぶ池のしばしにこぼれそめたる山吹の花

四月十四日父君の御墓にまうでよ

すゞ菜さく片山はたの春風の御はかの草をふかんともせず

五月二日の夜ものよりかへるとて

何となく昔の友の戀しきにかはづのこゑのしきる夜半かな

田中りん子の夫にれくまたるをとふらふとて

行く春の名残の空に雨すぎてぬれまさるらん草葉を予思ふ

夕鐘

くれぬれば月面白し花にのみいとひはつべき鐘のこゑかは

海上夏月

秋風の夢さへのせて海士小舟あがるゝかたに月ぞかたむく

灌佛

郭公たづねいるさのふもとでら佛の日にもあへるけふかき

氷室

氷室山まつかせ寒くくれにけり夏をば神やもりかへすらん

里夏月

わけくれし夏野の末に里とへば月こそ獨りあるじなりけれ

夏夢

山すみは夏もうき世の外なれや松のあらしに夢をふかせて

夜かへるまぢよて

五月雨のなごりまなざるいさゝ川忘れぬ月の影かすむなり

別をつる友にあひあふ心地して雲間の星をあふぐ夜半かな

觀世能樂會の舞臺にて邯鄲の能せし時

我みには醒めぬ夢路の高みくら心よ叶ふ世にこそありけれ

盆なれば父上の御墓にまうづるにわが重なりし
ころ御供していつもさるべき所々の御墓めぐり
せし事などおもひいだされていと戀し今朝使し
て手向させたる秋草の花のしとをかへりたるな
せものごとくに心ありけなり

女郎花はなふきかへす夕風に去年いかくまでものや思ひし

星

かく山の松の梢を包たるなりながるゝ星のあかつきのかげ

大和めぐりせし時宇治にて

かちまけのうらみもきねてうぢ川の波の音こそ昔なりけれ
古寺の色より外にこれもまたむかしなりけりうぢのしば舟
昔おもふ袖のしぐれは秋としもかぎらざりけりうぢの古寺

木津にやどりて龜岡氏と共に舟遊す

さしのぼし又さしくだす川舟の思ふ儘なる世にこそあまけれ
世の中の富も譽もわすれけり歌ふきさを木津のかはかせ
三輪にてやあまけんある夕

三つ山はまだくれ残るうげみえて三日月高しかづらきの空

磯城の都のあとなどひつゝ

みわの山くもの色こそ昔なれ千木たかしとしあとの歸らず

初瀬にて

はつせ川たえくかくす朝ざりはあわれきのふの夢の面影

多武峰にて

いつまでもわすれぬ友となりぬべし枕におつる多武の山風

岡寺にまうづ

岡寺の池の蓮のつゆのうへにひかげこぼしてあさ風を吹く

欽明天皇の陵を拜む

飛鳥寺ゆめのむかしとなれる世に神風さむしひのくまの森

粉河寺にて燈たてまつるとて

この寺の法の燈かよげても子を思ふやみははれんどもせず

和歌山ちかくなりけるに

睦ましく我を迎へてわか山の城ころあれにみえろめにけれ

又大和にかへりてかぐ山にのぼる

松の上のこの夕日の影ひとり神代に似たる天のかぐやま

ふたゝび大和にいでゝ藤原のあたりを行く

藤原の都こひしくたゝすめばこぼるゝ雨にかはづなくなり

法隆寺にて

たれもみな同じ木かげやたのむらんいかるが寺の夕立の雨

龍田にて

神山のまつみえそめて朝ぎりの立田の里にかけずしばなく
神のます龍田のもりは秋風の夏もこもれるところなりけり

道明寺にて

神うたのしらべたえたる梢よりしぐるゝ蟬の聲ぞおちくる
富士に登らんとて須走にやどる

ふとそめんあすのたかねやいかならん山郭公雨にちくなり
いよくのぼりける日

わが上に月ならでまたものもなし麓なりけりあしがらの雲
尾花さく富士の裾野の秋風になのるもあまた山ほととぎす
さかさまにふきあげられて雪とあるいふさや里の夕立の雨

下りてのち金剛杖にかきつく

雲の上の及ばぬ物と眺めこし富士の高嶺もけふぞわけつる
旅よりをさな子の用心の事なぞ消息のはしにか
きつけておくに

父上のもういくつ寝て歸るぞと問はれて母や答へわぶらん
八月六日父の御墓にまうで

夏草のはにあらはれて招くなりいつの枯野に根を留めけん
甲斐の國なる人に

山風に机のちりとほらひせてうたおもふらんひとぞ戀しき
薄

川風の色こそ白くちりにけれつゝみのすすき秋ふけぬらん
信濃なる人に

宵々につゆ折りしきて女郎花おほかるのべの月や見るらん

初秋雨

落ちろむる一葉の上の雨そゝぎ秋の哀れはこをよりやしる

霧

我どわが柴より外にかけもなし霧の中ゆくみねのかけはし

竹間月

うなる子がたけくらべせし窓の竹月のさはりとなれる秋哉

閑居秋風

秋風の芭蕉のうへを渡るなり鹿の音聞きに來んひとものがち

夜歸る道にて

川舟にさし入る月にくだかれし棹の恨もしらずやあるらん

笛をよくせし人の年忌に

ふねの音のきこゆるかたにわたるかり昔ながらの秋の夕風

月獨りたゝすむ宿の夕まぐれ笛吹くをちのいづちいにけん

ふねさゝにかよひしやどの庭の苔おちば積りて秋風そふく

曉月

月の色のそらにわかれてまばしまた夜に立ち歸る杉の下道

鳥

むらがらすいづくのねやにいそぐらん霜ふむ道の夕暮の空

平野のち子の父の京都の神官なるが今年の葵祭

にそのかざしつる葵なりとて贈りければ

露あがらゝさしそへけん神山の月の色こそこひしかまけれ

野月

思ひぬに月ものぼりて野づかさのまつ面白く暮をそめけり

面白く世をつくすらん月をたゞ心にまかすくものゆくへの
故郷月

あるじなき里の月影誰がための秋とや夜たゞ獨りすむらん
此月の初めまでにとて稿を起しつる和文典のま
だならねば

三日月の望になりぬる影みてもわがなす業の耻らしきかな
十月四日祖母君の廿年祭つかう奉るとてよめる
君のすみたまひし一間の西面にて夕日よくさし
入る處あるにわのが常に参りなれし事なごとり
あつめしのばれて
いつか又君とかずへん夕ぐれの雨にこぼるゝさゝぐりの音

いつか又君とあふがん青桐のこずゑにかゝる三日月のいろ
いつか又君よりきかん冬の夜の長物がたりむかしながらに
同じ日にとりこして大叔母君のも仕う奉る君の
御居間の東の一間にてわのがむらゝ遊びの面影
は大かたこゝに残れるにいつにかありけん羽衣
の能せよとて御手づから金銀の紙なごして天冠
のかたを作り太鼓の掛聲なごまねび給へる事も
ありしを今の世をへだてたる夢ぞかし

羽衣のわらはあろびの一ふしもむが行末のをしへなごけり
十二月始めつかた音羽ふじ子の葬を送りけるに
音楽をよくせし人なりければ

琴の上にかよひなれたる松風をこよひ落葉の下にきくらん

古寺

ゆふけむりはそくなびきて古寺の梢さびしく暮るゝ秋かな

古祠

山神のもりのまへなる丸木橋もみぢののちの人もわたらず

初冬

里寺のいてふの落葉霜さびて冬あたゝかにかすむそらかな

湊江にかれたつ蘆をうつしはの聲身にしみて冬の來にけり

十二月十三日田所貢の柩を送る道にて

人の世をいかにとどへばもみぢ葉の残れる枝に時雨ふるなり

廿一日ものより歸りて見れば女子の生れ居たり

しかば

宿の梅に花待ちつけし心地して笑顔うれしく向ふけふかな

子を待たぬ人にかと誇らましかゝる嬉しきけふの心を

廿七日は七夜なれば小石川にて生れたる心をお

ほせてさゞれと名づく

昔むさん千代といははははれにも玉の光の顯はれんまで

古寺の巻

明治二十四年詠草

一月のはじめつかた相摸めぐりせし時鎌倉をす
ぐるどて

鎌倉ときけば名もなき古寺の枯木のかげもたちずよらるゝ
古墳の尾花がもとに咲きまじるなたねもさびし山の内の里

入日さす波をまくらにつゞかせて旅寝たのしき夕暮のやど

返子に人の病を養ひ居たるを尋ねて

思ひきやさかこの海によるきみのかゝる處に君を見んと
驚にさきだゝれてもうれしきいおもはぬかたの梅の下ふし

同じ處にて

枕うつ波もうきよの外なるにさむれば向ふをちの富士の嶺
さらでだに冬あたゝかき浦里の梅さくやどに朝日さすなり
枯れのこる汀の蘆をまがきにてなみに心をおかぬやどかな
五日の父君の一周年にあたれば

池水に朝日まぢぬしうすらひのはかなかりける昔をぞ思ふ
風わたる夜さむの窓の燈火の消えてかへらぬ昔をぞおもふ

おちたぎつ川瀬の波に降る雪の跡も留めぬむかしをぞ思ふ

越後の川上喜衛武より雪の深さなどいひおこせ
ければおのれの暖國の産をにて雪國のさまいす
べてしらぬをいつかはとれもひわたる事なぞか
きて

いかならんけふの高嶺の物と見る雪を軒端のあけくれの宿

旅雪

家にいなばむかしがたりとなりぬべし夕暮まよふ雪の山道

水鳥

荒波のよせばかくれん岩の上に眠るかもめよあわれ世の中

初雪

あさりする雀のあとの見ゆるまでけさふりにけり庭の初雪

波

見えそむる火影さびけき浦里にゆふべさびしき波の色な

春の初めの歌

ふもと寺こぞみしうめやたづねみん高嶺の雪に春風ぞふく
わが宿の林の内よなりよけりこのみあるよのうぐひすの聲
わすれこし笛くちをしきゆふべかな月ふみかへる梅の下道

宇津木貞夫翁の謠うたふ友なりしに俄に身まか
られぬときよて

うちつれてうたひし物と驚けふにいづくに枝うつりせし

高畑こと子の父の賀に

たのしみのつきせぬ宿やめぐるらん松にしらぶる萬代の聲
父君の御墓に母君のをもあはせて石をたてたる

頃家人こぞりてうちつれまうでと

あすの來て春秋の花も移しうゑん常盤の宿と御靈しづめよ

残雪

春風に吹きのことされし山のはの雪も霞みて見ゆるけふかな
谷かげの雪のいるこそさびしけれ梅みてこゆる夕ぐせの山

春月

ゆく雁の名残さびしくみわたせば月こそ空に霞をそめけれ
霞む夜の月をかたしく旅寝に荒れし宿こそ嬉しかりけれ

夕梅

夕日影かすむうれし川上の梅咲くかたにさをやどかめん
山もどの一村はやし暮れそめて星こそ見ゆれ梅やさくらん

池

少女子の鯉よぶかげも春めきてはなの香よする池のさゝ波
春風い月とこよひもあそぶなりひとあきやどの庭のいけ水

鳥

山里のかきねの椿ちる頃の名もしらぬ鳥のこゑ予きこゆる
山鳩の雨よぶ聲もものさびし人めまれなるてらのこずゑに

夕鶯

くれのこるかた山ざどのもよばやし月になるまで鶯のなく

雨中花

暖かに雨うちかすむ川ぞひのこずゑの花になりろめにけり

水郷霞

柴舟に月の夜がすみつみそへていそぐともあき春の宇治人

春月

わらびをりかへる少女のうしろ髪空にもひくか霞む夜の月

若葉

あまの子も磯の若葉をつみつれて世のすさびに漏れぬ春かき

夕春雨

わかれつる人のあざりに似たるかな花ちりはてし夕暮の雨

川上喜衛武の花見にとて上京しけるが四月の末

つかた歸らんとするに

うらやまし都の花をわけはてしこしぢの春にまたもあふ君

小金井の花を見て

鳥の音もうきよの外のことちして春あもしろし小金井の里
此はるは心にかゝる雲もなしきのふもけふも花めぐりして
たゞ一木あるだよ春ののどけきにかさなる花の雲やいく里

くもの上に雲ころかをき天びどの花見車やたちつゞくらん
友のもとにて酒のみける日おかめの書に賛せよ
といひければ

すむ月のゑまひのどけし人の世の波も嵐もしらずがほにて
また何見るにかあらん美人のふりむきたる書に
かへりみるいけの汀に魚すぎて春風さむくさくらちるあり

上州伊勢崎にあそびける時

かせまたるわか葉のかげにまろねして水車さく夕暮のやど
みそらまでつゞく若葉の桑林まづながめにもどめる里かな
旅としも思はぬ空に三日月のかげ見ぬそめてやまを霞める
桑つみてかへる少女のうたばかりつゞみのこせる夕霞かな

春眠

みどり子のゆめぢの末にとぶ蝶の影も眠げになせる春かき

旅中落花

旅人も春はいそがぬ山ごゑの道あたゝかにちるさくらかな

春香

たきものゝ煙淋しく霞むなり花つみにいでし人や待つらん

故三條内大臣の百日祭に春後思花

世の人のちみだや空に霞むらん春はきのふのみよしのゝ山

宇津木貞夫翁の追善に春月を

うぐひすのなくね絶えたる岡の上にかすむも淋し夕月の影

又春雨を

塚の上の苔あたゝかにふる雨とさむけき土の下にさくらん

早苗

うゑはてし小田のさなへの下水にまづ影かはす夏の山の端
ふもと田は早苗とるらん神山の松の木の間に並ぶすがぶさ

曉

磯寺の燈火はまだのこる夜になみの上こそあからみにけを
けさも又あれつる森にうせにけりいたゞきいでし明星の影

夕卯花

ほととぎすきくこちする夕べかき卯の花月夜獨あがめて

首夏野

すみすてし雲雀の床の若草はその名しられて夏たちけり

新樹風

さくらの實ひろふ少女の袖の上にてばれてにはふ露の朝風

笛

入る月のなごり身にしむあつきに笛の音高し寐ぬ人や誰

夏山居

山水をかけひにうけて此夏は庭のはちすにひくぢうれしき

若竹

時雨さかん冬の頼みも思はれて垣の竹の子葉となりけり

首夏山

風わたる若葉の上にてめづらしく霞まぬふじの雪を見るかな

舟

波の上に浮ぶ一葉の蟹小舟よの渡らひもかくこそありけを

山家五月雨

栗の花おちてつもれる山里のわらの軒端にさみだれぢふる

商

鈴虫のこゑをこよひも命にて市にいそがんゆふひかくれぬ
雲の上に月みる人もあはれしれわぶ世渡りの虫のこゑはく
さりとりて市にいづれば女郎花月こそしばし送りきにけれ
大どのと聞の内にてさくやいかに霜ふみわけて朝菜うる聲

水邊夏草

夏くれば前の小川のまる木橋えげるまこもの底になりつゝ
なついたゞ草葉の下のうもれ水月の影のみまぢやわぶらん

山中時鳥

をりそへしつまぎの蕨それもあるに初時鳥さくやまぢかな
ほととぎす木曾路の月になのるなり旅の物憂き習のみかは
蓮

消に残る夕日の後の雲の色にはほひいでたる花はちすかな

夢後

いにしへの月かけ白くかゝるなりゆめのあととふ松の嵐に

夏草

夏草のほにいのでそめぬ古塚のしるしの松にたけくらべして

月前納涼

蚊遣火の煙もたえてふくる夜の闇のとぎと月さやかなり

船中納涼

棹の歌うたひかはしてあまの子の小舟に夏の夜と更すらん

夏菊

夏しらぬ里のしるしを家づとに手折りやそへん菊のひと花

晩夏

何となく秋に近くも見ゆるかなかはらぬ空の星のひかりも

瀧

さるの子おあそぶ梢のさがり藤しをれぬ花やたきのしら波
七夕

ほし祭る頃は来ぬらし山寺のかきのあさがは花さきにけり
天の川はのみねそめてくれわたる空おもしろし琴も聞えて

海夕立

夕立はいかれる魚のおもかげを波にゑがきて今ぞすぎゆく
松の根をうちこす波の音たかし夕立すらしをちのしまやま
朝とくものへゆくどて

何となく旅おもほゆる曙のかせひやよかに日ぐらしのなく
面影を草葉の露にとめおきて星はかすなくなれるららかな

夕立

しばしとてたちよる野べの松陰をのこしてすぐる夕立の雨

秋ちかし

秋風やしのびて空に遊ぶらん星のいろこそかはりそめけれ

遠情

夕日影しづむ波路のゆく末やこひしき人のものまなぶくに
八月十九日の夜月さよし鈴木まる子よ消息かく
はしに去年の九月にやありけんうちつれて能に
ゆきけるにれのれは橋弁慶をして歸り來ればあ
まりの月のよさに題わかちて歌よみしことなぞ
とりあつめおもひいでよ

しのびつる君も昔になまにけりあはれ五條のはしの上の月
雨中虫

虫の音はまくらに近くなりけり草の夜床に雨しめるらん

秋風

夜なくくに月ふきみぶく秋風を露にどのみも人やわぶらん

新橋に人を送りける夜

いでよゆく車の煙きぬにけりなごりのそらに月をのこして

松上月

中々に松の影ふむにはの月さはらぬよりもおもしろきかな

朝顔

日の影もこぼれぬ宿は朝顔のいのちさへこそ久しかりけれ

人のもとに

歌よまんこよひは來ませ萩もよし虫の音高し月もさやけし

いかにせんいつもかはらぬいろながら人まぢ顔の夕暮の空

月前草花

ふきくれし野分の跡の女郎花れこしながらも月を見るかな

いつにかありけん

柿の葉のいろづく夕べ何となく戀しき雲のゆくへを予思ふ

誰と見んうすむらさきの雲間よりうかびいでたる夕暮の月

霧

晴れてゆく霧の波間のをちこちに濡れし尾花も浮沈みして

花落家童未掃

さしすてよよはのまよなる山里の柴のあみどに櫻ちるなり

雨の夕

女郎花粟とこぼるよゆふぐれのあめはだ寒し誰とかたらん

なかくにとはれて物のさびしきは萩ちるやどの夕暮の雨

すすき原ふく風白くなりけり雲雀がくれと見しは昨日を
うつし植ゑし人は昔のふるさとに一村すすき風そよぐなり
友だちの墓にて

昔思ふ涙に目さへふさびりてしるしの石の文字もよまれず
あやしくも手向の水のにこれるハ涙や雨とふりかゝりけん
秋の雨

池水に柳のおち葉たゞよひてあきも夕日のかげぞしぐるゝ
旅寐する人いかならん燈のかげさむき夜にあめぞこぼるゝ
女郎花ちる

嵐にはたへし垣ねの女郎花こぼしそめたるもふしぐれかな
人とはぬ夕べの宿の女郎花こゝろしづかにちりそめにけり

川水のいろにすみゆくあまの原朝月たかしつゆよわかれて
ともし火

それとなく昔の友の戀しきはねられぬ夜半のともし火の影
秋花

山寺の卒都婆ながらにゆひこめし垣のみそはぎ花咲きにけり
仲光といふ能せし日おや子あうむのなぞいふあ
たりいかなることちかせしと人のいひけきば

これも亦夢かと思ふ何事も夢となるよのこゝろならひに
田家

寐あがらに門田のなる子ひく宿は入るまで月の影も隔てず
紅葉

昔わが父とやどりし山でらのひともとかへで秋ふけにけり

秋雲

秋なれやくちぢし色のゆふそらにゑがきそへたる雲の遠山

水邊暮秋

流れよる紅葉もくちて里川のいろこそ秋のかざりなりけれ

十一月のぢかば安中までゆく途に瀛車の窓より
見いだして

浅間山はつ雪しろし旅人のこよひのどこやさぬまざるらん

磯部にやどりける朝

浅間山けむりのすゑに月おちてしらぬ旅路のそらも迷はず

妙義山に紅葉見んとてのぼる

織子のこす木々の錦も神わざのくすしきひとつこれの岩山

夜嵐やいで入り今宵あそぶらんひらきすてたる神の岩門に

雲の色は變らずながら秋ふけて岩門をくぐる木がらしの聲

神杉の木の間にくにもみぢ葉をゆふひいろぞる白雲のやま

いく時雨しぐれくくておく山の苦むすいはは紅葉しぬらん

紅葉ばの盛りよあへるそれのみか今日こそ神の祭なりけを

碓氷峠のおそしと聞きつれどなほ見どころあり

碓氷山やまふどころの紅葉ばに神のたくみの奥も見えけり

もみぢばのおくれ先だつ憂ひをもしらでや水の下くぐるらん

安中にかへりては美濃部精の樓にやどりて

ゆあみして神代のまゝの青山にむかふ心をなにとたどへん

うたかもふ外にこよひの事もなし向へばなるをちの白雲

少女らの稻刈る歌もしづまりて淋しき小田に月ぞふけゆく

あすよりの岩根の落葉ふみわけて幾度夢におりのぼるらん
このたびの紅葉見のすべてかの人のたまものな
れば

奥山の紅葉の色もくらべての君がなさけのふもとなりけり
安中の室橋信好の磯邊に同行せし人なりしかば
いつか又君ときかましうすひ川々瀬にむせぶあき風のこゑ
妙義にて紅葉をる人あり

神山の岩垣もみぢおもひきや風よりさきにきみを見んとは
雨の日瀧の川の紅葉見にゆきて

ろみつくすちしほの紅葉ひとまほのなかく雨の恵みなりけり
もみぢばのしがらむ見まば山川の水には秋も急がざりけり
共に旅せし人の許に

忘るなよ淺間おろしの末さねて燈火消えし夜半のたびねを
わするなよまくらになれし川れども今は戀しきゆめの面影
忘るなよ秋れもしろき山里の月ふみわけてやどりせし夜を
初冬

山里を秋よりのちにとふものは夕のしぐれ夜半のこがらし
落葉

つれづれのすさびに風やもみぢばを集めての又吹散すらん
人をまつ

時雨れ來ぬ契りし人はいかならん道にやぬるゝ陰や尋ぬる
雨寒き日鈴木まる子が福嶋へ立ちて後いひやる
おもひやるきみぶたびぢのゆく末の雪にやあらん白川の關
枯野月

さすからに草葉に氷る月かげはやがて末野の霜となるらん

水鳥

離洲に羽ねほす鴛のあるぞともしらで薄日のまた隠るらん

涙

緑子の寢覺の顔にかくものいたとおほかたの花のしづくか

人の病をとふとて飴に添へて

假そめの雨のしづくも竹の葉の露にしかへば嬉しからまし

歳暮

神まつる外にはのこる事もあしいざ一年のゆめがたりせん

友鳥の巻

明治二十五年詠草

一月のはじめもの書かんために大宮に遊びて

霜氷る松のおちばをふみわけて日かげにあさる友どりの聲

起いでゝきのふの續きいざかゝん枕の火桶すみもおこりぬ

五日例の父君の御墓まうです

親鳥のちくへを空にたづぬれりこたへぬ雲の色ぞしぐるゝ

宇都宮の人来てこの夏の必ず日光になどいふ

二荒山すぎもる月を身にしめてうたはん夏の契りわするな

去年の秋妙義の紅葉見にゆきて下仁田といふ方

に道ふみ迷ひたる事ありしをおもひいでゝにや

あらん同行せし美濃部氏より下仁田の葱をねく

られしかば

夕霜に谷の紅葉をまかせおきてかへりし山の名残をぞ思ふ

霰

來んはるのつぼみを見せてゆめふかき草の枕を訪ふ霰かな
田鶴が音の乱れてさわぐ雲井より夕ぐれすどくふる霰かな

冬花

足引の山ふところにすめる身の雪よりさきに梅を見るかな

新年

天地のひらけしまゝの人心またたちかへりいはふけふかな

山

水鳥のつばさばかまに見ゆるそむる海路の末の山もなつかし

遠山雪

夕どねの山路はそれか二峯の雪になりぬるありあけのかけ

大坂人の賀に寄松祝

君がへん千代にひかれて松が枝も花さく春に逢はんとすらん

向嶋を散歩して

すみだ川つゝみの柳いとひてまたるゝねだに春風ぞふく

そゝろあるきせし道にて

山でらの梢もはるの桃さきて人まちがほにうぐひすのなく

古塚のあたりの草も花さきて春日うらゝに野のなまにけり

小兒のわづらひけるころ春雨ふれり

いちじるき雨のめぐみをわが宿の花の蕾に見んよしもがな

ものよりかへるに

星かげもまばらに霞む夕暮のあはれをそへて琴の音する

初花

松風をまだうきものとしらぬまの蕾を花のさかりなりける

春夕

寒からぬいそ山かげの夕月夜はじめて花にかすむころかな

春草

谷陰のくち木のうつぼ春のなほ苔の色こそむかしかりけれ

春社

くちのこる鳥居の笠木此春もおつる雲雀のみちをしへつゝ

旅にいであつみちにて

明暮にみなれし花のあたりまではや旅心地するわしたかな

漚車にて駿河路にかゝる雨景いとさびし

つり舟のかへるかたよりぬれろめて春雨かすむ三保の松原

京都にやどりける朝雨はれたり

朝戸あけてうち向はるゝ東山まづ何よりもあつかしきかき

花はいづこも春なりといへば

雨のれち風のさきにすわれは来しちぎりうせしき山櫻かな

おむろにて

あは雪のこぼれしばかりちる花ををしとてやなく鶯のこゑ

なほゆくく

大澤のつゝみの花の雲間より見ゆるもさびしみさゞきの山

嵐山の花なにもいはせす

嵐山花の盛りにあひにけりさだめなきよとたれかいふらん

さしすてゝ花やみるらん大井川いかだのうへに春風をふく

花は少女をとめは花に似たるかなうべこそ花の都なりけれ

桂なぞいふあたりをゆくに蛙多くなきたてたり
何ならぬ蛙の聲もなぞころのはなにはうたふ心地のみして

松尾の社にまうづ

松の尾の峰のあらしも聲とめて西山づたひはなや見るらん

祇園の夜ざくら見にゆきて

かぶり火の烟は花に霞む夜の空おもしろくあはゆきずふる

月輪御陵を拜して

ゆきのうちに春しりそめし月の輪の山松が枝に霞たなびく

寺男その御門前を掃ひるたり

花ならば帚とるてもたゆましくしかればをよするはるの庭守

稻荷山にのぼりて

春風にふきのぼされていなり山杉よりおくの花も見しかな

大坂をたちて大和路に向ふ雨また瀛車をおくれ
り

なにはでら塔をすみゑにかきすてと麥生色ぞる春の雨かな

六田の渡をわたるに雨なほくらし

いにしへの六田の淀の川柳おもかげとほくかすむはるかな

吉野にて

花はまだいそぐともなき夕暮にきくもよしのと山寺のかね

これやこの年月ながく顔に見ゆ渡りつるみよしのとはな

みよしのと吉野の花を見ぬひとや花を少女に譬へそめけん

藏王堂にて

うゑかへていまわか木の櫻花なれも昔のはるやかなしき

御陵を拜す

塔の尾のみさゞき寒くふる雪はなほ花をらぬ心地こそすれ

金峰の社にまうづ

花の上にさはらぬばかりふくもよし吉野のおくの松の春風

吉野をいづるとて

花にねて花にねざめて花にゑひて花にうたへり何をか望まん

大坂に歸るみちにて

うち霞むながめの末のなにはでら戀しき人の心地のみして

荒木やす子をとふに短冊をいだして何か一つと

乞ひければ目前のさまを即ち

こん春も又こん春も來てを見ん高津のみやの霞むけしきを

菊岡彌八郎れ懇ろなる心づくしによりて吉の

花の時節をも道をも宿をもぬし事なれば大坂に

かへるすなはちよみておくる

面影は夢もはちれぬみよしのと花こそ君がめぐみなりけれ

神戸行の瀛車に乗るに見渡す限り菜種ならぬは

なし

思ふ事かなひしうへに思ひきや思はぬかたの花見せんとは

須磨にて

古寺の若木の花にいまもなほふくかうしろの山おろしの風

何となく須磨の古寺きて見ればむかしに似たる春の夕ぐれ

古へもかくやあはれにながめけん夕暮かすむ須磨のうら波

上のやまかすみおろしのすゑなれや藍もてゑがく淡路嶋山

かへりに神戸に遊ぶ

須磨もよし舞子も嬉しそれならでけふこそ見つれ布引の灘

布引の瀧の白糸くりかへしくりかへしてもあかぬはるかな
生田川流れてすぎしいにしへをうつすもうれし摩耶の山蔭

琵琶湖のあたりを行くく

島姫のすさびすてたる琵琶の音も聞く心地して霞む海かち

岐阜をすぐるに地震の跡猶見えたり

すむ人のこゝろも知らでかたむきし軒の春草花さきにけり

家づとの櫻葉子を上真行にかくるとて

めせや君花の重荷にかひうへし吉野少女のやまづとぞこれ

加賀人の賀に寄松祝

聲毎に千代をこめたる松風の君ぶたもとにちれて吹くらん

また人の賀に寄鶴祝

霞む日の空に友よふ蘆田鶴のその子の千代の君ぞかぞへん

よひくに向ひあれたる盃のそこには千代の影は見えける

春月

小松原霞みそめたる夕月のかげおもしろしたれをさそはん

毛山正辰は家に寄留して笙習ひに通ひし人なり

國に歸りて後消息のはしに書きやる

笙の音のたむし宿こそさびしけれ若葉は去年の面影にして

夏雨

椎の花おちてたゞよふ山がはの水ささむきあつのおめかな

東儀彭質の柩を送りて

上野山松のあらしのいづかたに人のゆくへを今宵たづねん

夏草

夏草はしげりにありぬいさふ川下ゆく水のおとをのこして

上州に遊びける時

かはづきく人はかへりて里川のくる木の小橋月かすむなり
蟬の聲しぐれそめたる木の間より夏なき越の雪を見るかな

雨 後

みづたでの下葉すゞしくこす波に夕だつ雨の名残をぞ思ふ
須磨に病を養ひ居る人のもとに

うらやましうしろの山の山風にたもとふかせて歌おもふ人

僧

落葉ふく嵐のあとのみやま寺あかくむ道はけさもまよはず

晩 夏

何となき虫のこゑこそまじりけれ夏も末野の萩のうはかせ

暑さの強きは物かきつかれたればすゞしき方に
と川づたひして

水車めぐる浮世のわざとしもしらずがほなる音のすゞしさ
瀧の音にかきみだされて山川はわがくちずさむ歌も聞えず
山里は市のあたひのほかになほ瓜の花こそさかりなりけれ

ま た 旋頭歌

摘みためし花をあつめて家路急がん文机の筆やまつらん紙
やまつらん

海水浴にとて母と共に片瀬につかはしたる小兒
ありそれに貝ひろふ袋を送るとてかきつけたる
歌

汐水にふかれくゝて江の嶋のからすのごとく色くろくなれ

荒きみにうたれくく江の嶋のいはほの如く身は強くあれ
 砂の上にいるは習ひて疲れなば波と唱歌のおさらへをせよ
 是もまたかろへおぼれて忘るるよ集めし貝の二つ三つ四つ
 砂山の松の下みちふみわけて今かへるらんわが子をぞ思ふ
 いま三日たふばむかひに参るべし妹なかつな母こまらすな
 八月の末瀛車の窓より見いだして
 秋風は上總の沖やわたるらん舟の帆かげのこちよげなる
 松山にさす日のかげも何となく秋の景色になれるころかな
 金澤なる東屋にやとて
 枕とる窓の火かげのたへぬまですさきの松に夜風ふくなり
 わまの子が網はすふねの夕日陰いづこともなく秋めきにけり
 岸陰につなぎすてたるあま小舟うつ波白く夜はふけにけり

初秋

世を渡る舟のゆくへも名所のけしきの内にかろへてみ
 わが箸にもれてしばしの夕波にをせる生簀の魚もあまけり
 三日月のかよりろめたるゆふべより堤の榎いろづきにけり
 静かなる夜
 琴はあれどひく人もなき山里をとはれてをしき月の影かな
 草のかのしめる垣ねにふけそめていよく月の面白きかな
 時として
 天地のめぐみにもれぬやまざとの垣の藤豆實となりけり
 ある朝
 芭蕉葉の廣葉すしくなりけりいざ筆取りて歌書きてみん
 霧ふかき朝

庭の面はぬれたる紙に七草をかきちらしたる心地ころすれ
女郎花はなさく庭の朝霧ははれたるよりもおもしろきか
うちわたす遠の松原霧はれてあゐながしたる空もうつくし

再び仕官せよと勤むる人に

中々になれては露のおきふしも梢にまざる野邊のこほろぎ
摘まれては又すてられん花よとも色なき露の身ころ安けれ

片瀬にてやどりける家よりもらひたる團扇に龍

口寺の書をかきてありしかば歸りて後

たが夢のあと訪ふ物となりぬらんかぶへおれたる里寺の鐘

ある夕

あはくこくゑがきわけたる遠近の木々おもしろし夏の夕暮
星の數かぞへ覺ゆるしうなる子の聲もすゞしく暮るゝ空かな

おのが住居の歌よみあつめたる中に

柿の實のいろづきそめし山里を秋のこゑしてわたる雨かな
二つ三つ垣根にのこる朝がほの花もちひさくなれる秋かな
きゝてたゞうれしき物はとくくと枕にひびく雨だりの音
きのふけふ穂にいでそめて薄原うすくれなるの秋風ぞふく
花すゝきはにいづる頃の村雨はたゞ何となく淋しかりけり
たけのびし薄のかげもものすこく人なき宿に夕日さすなり
暮れそめて月になゞゆくすゝき原長き短かき影も見えつゝ
わが宿の垣ねの尾花うす霧の中になてるもおもしろきかな
まつものは月より外になかりけり萩ちるやせの夕暮のうら
萩の花ちりしく庭の露の上にあほかげのこすありわけの月

荒井の薬師にまうで

栗もよし柿もうみたり山里の秋たのしくもなれるころかな

閑居月

待つ人もあきて暮れ行く我宿は月ひとりこそ浮世なりけむ
何ごともころろにかなふすまひかな池にちる萩松わたる月

秋風

莖がちに立てるすゑ野の女郎花なほやせよとや秋風のふく
秋寒し風物すどしいかにせんなれぬすまひのやまざとの空

十五夜

山里の垣ねのすゝきかめにさし手向くる窓に月ものぼりぬ

秋鳥

大方は萩ものこらぬ山ざとにまらぬ小鳥のこゑぞきこゆる

秋時雨

山里は秋の日影の淋しきにけふもときくうちしぐれつゝ

川

春風にふきのこされし心地してひとすぢしろき谷川のみづ

萩ちる

ありわけの月はわかれし山の井のつるべの水に萩が花ちる

露寒し

かれくゝにたてる末野の花すゝきちる露寒し秋もいく夜ぞ

曉

けふもまたいたゞき出でし明方の月面白きたにのかけはし

鶉

うつ波の音をうしろに越ぬれば山路しづかに鶉なくなり

葛

ひとしきり波うちよするこゝちして葛の上葉をわるる夕風

小松

小松原末はるく霞む日はたびも忘れておもしろきかな
末とほくかすむ岡邊の小松原をどめおそでも見ゆる春かな

ものゝ音

秋の雨のやゝはだ寒き夕暮にいづこあるらん琴の音をずる

折にふれたる

まつ物は月より外になかりけり萩ちるやどのゆふぐれの空

秋の田刈る

一年の楽しき時になりぬらし稻刈る小田につどふさとびと

和文學史の成りたるを祝ひて草稿を机につみそ
れに酒肴など供養ごころにろなへつゝ

世の中の常に變りてうれしきは馴れつる筆の別れなりけり
鬼の首とりてうれしと誰かいふ今日の心は天にのぼるまで

十一月日光に遊ぶに二荒山はましろなり

秋と冬行きかふ神のそでならしふもとの紅葉峰のしらゆき

霧降にて

今日までもこざとし我やたらふらん山彦さむき霧ふりの瀧

秋旅

ふくとなき春の風さへ旅といへばさびしきものを秋の夕暮

秋寺

山寺は秋にぎはしくなりにけり一木の紅葉名にたちしより

去年の春まで住みつる小石川の家をすぎて

人の取るつるべの音も住み馴れし家と思へばなつかしきかな

初冬

苔のいろ垣のすがたもうらがれて淋しき庭に冬は來にけり
旅のしぐれ

さらでだに冬は日影のみじかさにしぐれひまなき旅の山道
伊勢參宮せし時

天の戸を出づる日影をこゝにきてをがむも神の恵となりけり
五十鈴川神代ながらに行くこづのきよきを民の心ともがな

二見浦

夏ならばゆめを吹かせて一夜ねん二見の浦の松のあらしに
筆とりて童あそびにゑがきたる二見の岩を今日見つるかな

枯野の巻 明治二十六年詠草

寒月

霜とさえ雪と光りてはてもなき枯野のうへをわたる月かな
畫

草かりのうたおもしろく聞ゆきて堤の夕日かげもいそがず
駒場にすむ人に

春たゞば酒あたゝめてまち給へうぐひすきゝに君を尋ねん
春のはじめのうた

雪きぬて山里とほくかすむなりいづくよりまづ梅を尋ねん
若草も夢のまくらやもたぐらんかすみそめたる夕月のかげ

ある夜

木がらしのたえまゝに聞ゆるやおくれし雁の子を思ふ聲

春

いとけなく遊びろめたる春風をやました水の色に見るかな
きしの色はまだかれくの山川に水ころ春の聲はたてけれ

梅をさぐる

そこにゆく牛飼わらはこと問はん梅ある寺や森のいづかた

夕鶯

鶯のこゑをたきぐにおひそへてゆふべいそがぬはるの山人
春風もねぐらさだむるゆふ山にうぐひす獨いろがざりけり

曙

あけわたる海の上こそしづかなまかまどの煙舟になびきて
遠方の松原くろくまぬそめてたびおもしろきわけばの道

往事

ありと見し親こそ夢となりにけれわらは心は猶うつゝにて
顔に墨ぬられぬりたるそのかみの學びの友もなかばなき人

柳

つり人のさをよせかけし心地してつゝみの柳糸ぞながるゝ
ひともとの川そひ柳あめみぬてくれんとすれど暮れぬ空かな

若草

若草は摘むべき丈になりにけり見ざりし花の色もまじりて

初春月

鶯のおどづれそめし夕ぐれにかすむうれしき月のいろかな

雛祭

ひなまつる家おもしろし少女子のまめ盃もかすめぐりつゝ

柳

ひととほはぬ門の柱のふる柳はるはさすがにいとたれにけり
雪消ゆる

鷺の毛の散りたるばかり見えし雪うせて長閑に霞むのべかき

見花

けふも又岡づたひして古寺のしらぬ花をも見いでつるかな

落花

苔の上をまだらになしてちる花の雨に音なきゆふぐれの空

藤

中嶋に背をはす龜もかすみぬて藤おもしろくさける宿かな

春風

琴の音のあるじをとへば青柳のこたへぬぬだに春風ぞふく

夕霞

草摘みてかへる少女のゆくへまですみゑよなして霞む夕暮

達摩のあくびしたる書に

九年むかひなれたるふるかべのこほろぎ寒く秋ふけにけり

菊岡さだ子の父の六十一の賀よ

雲の上に千代よびかはす鶴の子のその親鶴の齡ひしらすも

君ならで誰よろづよの友とみんこけむすいはほ池にすむ龜

遅日

夕月は花の梢にかゝりてもまだくるゝとは見ぬぬそらあき

樵路躑躅

柴人ぶたさびせしのゝ木がくれにおも影のこす花の色かな

暮春

春もはやわかれをつけて行くそらにひゞくも淋し入相の鐘

山里の垣根のわらびたけのびて心ぼそくもなれるはるかき

春星

今までもみわたる星のかくれしは霞むやいくへ春の夜の空

旅泊

礎おろす音こそ響けわが外に夜ふけてかゝる舟やあるらん

山家首夏

山里は夏まだ寒しくれそむるのきのわか葉に月もかすみて

水邊首夏

風わたる池のうさくさいつしかど夏の色にもなれる頃かな

海邊首夏

いさり火の影も涼しく暮れそめて霞まぬ波に夏はきにけり

閑居首夏

ひと訪はぬやどの鶯いつまでか春にかくれてなき残るらん

橋螢

五月雨よながれやせんと危ぶみし橋のあたりを行く螢かな

農

一うねをけふにのこして歸りつる小田暖かにふれる雨かな

百合

罪もなき子の泣顔に似たるかな露もつ庭のひめゆりのはな

貝

磯ぎはにかりたつ乳兒の貝合せ負くるや櫻勝つやもみぢ葉

夕立雲

松山に一むらかゝる夕立のくものあしこそゆるぎそめけれ

納涼

わが影をうつすも楽し庵のとのいさゝ小川に夕すゞみして

夏鳥

あつからぬ先にといそぐ山みちのなつくさがくれ鶯のなく

七月の半山梨めぐりせんとて出で立つ時

夏の日も休まぬ蜂の跡とめてぶだうの花のかげやたつねん

小佛にて

あつかりし事も忘れて夕日かげうすらぐ野邊に花の紐とく

横にさす夕日すゞしくなりにけり降りしやいかに雲の遠方

笹子を越ゆ

笹子山登りし方を見おへればなれて追ひくる風もありけり

田野村の景德院にて武田氏の生害石を見る

物いはぬ石のほとりに立ちよれば梢隔てゝ日ぐらしのなく

天目山に登る

天目のやま風さむくおろしきてむかしの夢の末もつゞかず

なでしこの花こゝろなしこれやこの朽ちし屍のなれる岡山

勝沼にいる

朝露はぶだうならざる色もなし秋風いかに富まんとすらん

御嶽より馬にて歸る

待てしバシ危き岸に駒とめてきは見てゆかん奇しき岩やま

山みちは駒のたてがみ吹きみだす風よゞ外にあふ人もなし

武田氏の古城を訪ふ

いづかたに昔のこゑをのこすらん畑の瓜づる風もうごかず

身延に詣づ

法まなぶ人はねむりて身延山ともし火青くさよふけにけり

此寺のいはれを知らぬ身にも猶まづすむものは心なりけり

舟にて富士川を下る

今まではうしろを見せし富士の嶺も表になりぬ一日へぬまに

雨の後に月をみる

雨はるゝ野邊の千草の露ごとに光をわけてのぼるつきかな
雲はれぬ風をさまりぬ月とわが二人になりて夜は更けにけり

妻うしなひける頃よめる歌ども

なみださへこぼす力もなきまでになりたる人を見るを悲しき
治むべき家さへ子さへふりすてゝ別れし人の恨めしきかな
唇をうるほす水もいまいはやどゝかぬ人となりよけるかな
二つあるものゝ一つを失ひぬをさな子いかによに育つらん
まだしらぬあすの心やいかからん妻あきやどの秋の夕ぐれ

火は消ぬぬ灰より外にもなしろの灰さへに影は留めず
歎かじと幾度思ひあきらめて見れど子のある身をいかにせん
あすよりは袖の綻びたれ縫はん悲しき世にもうまれけるかな
思ひあまり人見ぬかたに向ひては日に幾度か袖しぼるらん
諸共に植ゑつる花を君にまづたむけんものと思ひかけきや
花を見て泣かんものとは昨日まで思はざりしをわはれ世の中
秋ふけてのくる枯のゝ花すゝきたより少なくなれる我かな
聲たてゝ枯葉をわたる秋風もつまある人はよそにきくらん
あるじあき人の家にやまよひけんわがやに歸る心地だにせず
門にいでゝ送りし人は送られて歸らぬ人となりにけるかな
見る毎に枯葉のみまさる花みをばいよく遠くなれる君かな
松が枝にかゝりそめたる三日月をともに見し世の人は歸らず

うきこともをかしき事も語るべき人なき宿に冬は來にけり
月は又まどかにありぬもみぢばのちりにし人を何にたどへん
月みつゝ思ふらんとや思ふらんならはぬ露の床にすむひと
諸共にあそびし人は夢なれやかれのゝ日かけ春もかへらず
冬枯の木陰の落葉かすゞにかきあつめつゝ昔をぞおもふ

五十日祭に

せめてもの君の名残と思ひつる祭もはてとなるがかなしき

秋聲

とりあつめ秋のあはれを聞く夜かな庭のむしの音軒の村雨

田家秋風

豊年を祝ふ祭のはたの上にくもゆたけき小田のあきかせ

夕野分

むら鳥つまのゆくへを吹きわけてのわきずさわぐ夕暮の山

古寺秋夕

栗ひろふ人はかへりてふもと寺さびしくなりぬ秋の夕ぐれ

稻花

けふよりは秋たのもしくかりにけり月にほへる稻の初花

秋夢

夢にみし雨のなごりをいまもなほ聞かせてふくか萩の上風

湊月

ひるの雨におほひし苦しきかへて湊の月にあかす夜半かき

森霧

墨筆を洗ひし水のいろに似て霧おもしろきもりのあけぼの

秋水

心なき野中のみづのけしきまでさびしき秋になれる頃かな

秋鐘

中々のちからなりけりわけまよふ尾花がすゑの入相のかね

山の井の巻

明治二十七年詠草

井氷

山の井は氷の下になりはてゝ水にこそかくあさぼらけかな

冬残月

かぎりなく身にしむものゝ霜枯のこすゑにのこる有明の月

夜霞

夜あらしに消えたる窓の燈火をわらひがほにもとふ霞かな

杉雪

寺山の杉がえしろくかりにけり木陰の塚やうもれはつらん

初春雨

花をまつ夜半あたゝかにいつきかん行末遠き春のあめかき

夕霞

天の原こひしき人のねもかけをみせてもかすむ春の夕ぐれ

山を望む

明暮に向ひなれては富士のねも低くなりたる心地こそすれ

鷺

夕日影色どりわたす波の上をよこぎる鷺のうつくしきかな

煙

かすむ日の沖に一すぢたちそふや入りくる舟の煙なるらん
三月中旬人の越後にかへるを送る

此秋の月のちぎりを忘るなよ越路のろらにかへるかりがね

春 草

少女子がたもとの色に萌えにけり行末霞むのべのわかくさ

春 雨 晴

二つ三つすゝなの花も見えそめてはれゆく雨の末霞むなり

貝 ひろふ

歌によむものとしらぬ少女子がひろふもやさし梅の花貝

石 面 苔

いしぶみの文字も埋めてわを獨り春しりがはの苔の色かな

懷 舊

今少しいふべき事もありつるを影よりもろく消えし君かな

梟

すみすてし野寺の森のこずゑにはくれぬうちより梟のなく

谷

大かたの人まだしらぬ谷陰のさくらを一木見いでつるかな

首 夏 水

躍りゆくこかばがくれのいさゝ水魚よぶ人の影も見えけり

更 衣

ほととぎす聲たえし目をこよみにて衣がへする木曾の山人

山 中 殘 鶯

夏さむき山下かげのうぐひすのいつも初音の心地のみして

夏 木

紅葉せん秋の哀れもまだしらぬかへでの若木夏の來にけり

谷残花

花ひと木残ると見れば谷陰のはるもかへさの道まよふらん

雨中薔薇

いばらさくかた山里の袖垣に夕ぐれさむくかゝるあめかな

鳩

山鳩よふまれながらもふる寺の軒のはるくさ花さきにけり

萍

何となき山田の水もうきくさの色すゞしげよなれる夏かな

夜路

ゆけばたえとまれれば續く虫のねをよそにや聞かんわけや迷はん

曇

なかくにはれたるよりも楽しきは時鳥さくゆふぐれの空

山中時鳥

時鳥よるならできく夏山はひとりこゆるもおもしろきかな

早苗

早苗とる時の來ぬらし遠近にひゞく田うたのやまびこの聲

紫陽花

五月雨の日數も末になりぬらし盛りすぎ行くあぢさゐの花

池五月雨

みえそめし蓮のうきばを池水の下になしてもはれぬ雨かき

夕水鶏

村雨をもよほし顔の夕まぐれ水鶏をきかみやみあましかば

船中夏月

磯ぎはに繋ぎすてたる海士小舟かりても月に涼むよはかな

雨後夏草

村雨のなごりのつゆを夏草に拂はでみるもすゞしかりけり

野 螢

たけ高くのびし夏野のすゞき原なびくかたよりゆく螢かな

夏 魚

うなる子が盟の水にはなちかふ鰯にも夏はなりまてしがな

夏田家

あす一日うゑば門田はをはるべし夕日うれしきをちの松原

鎌倉雜詠

潮あみてかへる少女の袖の上にふさうめにけりうらの秋風

かり登る人聲まれになまはてゝともし火すゞし長谷の古寺

磯山をいろどりわけてのこる日の影ゆく舟やたが戀ふる人

波の音の遠くあるまでさよふけてきゆるもうれし窓の燈火

江の嶋にあすは遊ばんふけそめし星の色こそ日和なりけれ

天地は皆わがものとなりにけりいざ歌よまん風よきてきけ

浦風にふきおくられてゆきかへる都の夢もすゞしかりけり

たちならぶ松かけごとみにみえそめて海もかすある明方の空

けふも又いざおきいでゝ汐あびん由井の濱松朝日さすなり

浦風にまくら吹かせて寝ながらに月見る夜半は家も思はず

頼朝の墓

かまくらの山下かせになびきつる草木もいまはたゞ秋は聲

由井濱

うしはあむ人もつとひて古への由井の濱邊は夏予にぎはふ

鶴岡八幡宮

つるが岡の松ふきおくる秋風にいてふの落葉数ふるひゆく

稻村崎

二つ三つ沖ゆく船も見えそめて夕日はれゆくいなむらぶ崎

七里濱

うちけむる七里がはまの波間より浮びて青き江のしまの山

江嶋にて

おもしろく暮れ行く嶋の松の上に三日月一つみいでつるかな

三浦郡の長者園に遊びて

飛ぶ鳥のゆくへはるかに見わたせば霞に残るかまくらの山

沈む日のなごりの雲にかきすてし墨繪の富士の美しきかな

大宮より歸るみちにて

秋寒しなかばいろづく山ざとのいなばの風に雨もこぼれて

波もなきみづのれもてに富士見わた秋美しくなれる空かな

おもひいづる事ありて

うちつれてあろびしのべのすすき原昔に似たる秋風をふく

共に海水浴しに來てゐたる村岡たつ子が歸りし

あとにて鎌倉より

濱にいで貝拾ふにも人ひとり足らぬけふこそ淋しかりけれ

月前薄

うすゞみの薄を窓にかきすてふくるもをしき秋の夜の月

鐘

紅葉ある山にくとわけくれておもはぬ寺の鐘をきくかな

朝顔

朝顔のはなより下にかりにけり寺井のみづのありわけの月
海邊月

安房上總おもかげかすむ波の上に大鳴かけて月ぞすみゆく
遙々と月にうかれてかへるさの磯路の汐に取られるかな
月かげのふけゆくまゝにわたの原さはる夜舟の漁火もなし
浦賀に遊びける日あたご山にのぼりて

出でゝ行く舟の煙のおもかげに霞みのこるやあはのとは山
凄

朝なぎにたがいでふねかかくるらん凄の岡に人のむれるる
佐々木信綱の散歩せずやといさなひおこせたる
に

若葉見にいざいでたゝん山里の初ほとゝぎすそれも聞くべく

社頭松

わがために母のうゑたるうぶすなの社の松も春ふけにけり

木陰納涼

けふも又ふづくゑすゑてわが庭の桐の木陰に暮しつるかな

雨後夏月

夕立のちどりさかまく波の上をしらすおほにも渡る月かな

中川則祥の讀本字引のはじめに題す

斧とりてきりひらく人のなかりせば言葉の林誰かわくべき

雨後紅葉

村雨にふりこめられて山寺のもちをひとり見る夕べかち

風前擣衣

松風のたえまゝにきこゆるやどほさとをのに衣うつこゑ

月下菊

庭のおもは月とはかとなりけり霜も心や空におくらん

初霜

山鳩のふみこぼしたる紅葉ばにけさみえそめし霜の色かか

十一月近江の石山に遊ぶ

けさいまだ犬よ里外のあともなしもみぢかさなる古寺の庭

京都の秋見ありさける時

ちはやぶる加茂の神杉秋ふけて染まぬ色さへ淋しかりけり

もみぢよりもみぢにいりて東山おもはぬ佛をかむけふかな

清水の塔のたかみにくれのこる日影さびしき秋のくれかな

いにしへの二條のみきの松の上に木高く秋の色の見るかな

高尾の紅葉をすりたる手拭を人におくるとて

北山のしぐれの色を人とはおもゆるほのほの雲とこたへよ

閨怨

ものゝふの妻のならひをいかにせん千里の外に雪にちる頃

かちどきの歌と聞きしは夢あれや枕にのこる木がらしの聲

爐邊閑談

ひとりよりふたりあつまる言の葉の友も嬉しき埋火のもと

晚鐘

あはれさは雲雀もそらにしりぬらん霞のおくの入相のかね

枯野霜

枯尾花あびくかたより消ぬそめて朝日にぬるゝ野邊の初霜

早梅

冬あがら霜もまだ見ぬうら里は梅さへ時をわすれてぞ咲く

水上落葉

をし鳥もうきすや空にたどるらん汀かくして紅葉散るあり

枯野月

月ひとりふけゆく野邊のすゝき原霜より外に咲く花もあし

深谷講習會よはじめて臨講しける日山本樓の宿

りに人々あつまりて酒をすゝめ席上にて題いだ

し歌などよむに 暮秋眺望

面やせてふてる秩父の山のはにけふも時雨の雲を見るかあ

また松

千代をへしみどり深谷の一つ松里の榮もかゝれとぞおもふ

とよめるは此地八景の一なりといふ名木の松を

けふ見たればなりかくて盃かさなり興いよ

そひければ

ひとぐの言葉の花もさきたまの里の旅寐を樂しかりける

あどいふほどに旅順口陥落の報知來れり筆をか

きもあへず

男の兒をれかひある時に生をわひて此音信を聞くぞ嬉しき

とかきて示せを見て一人が講習會開講の日に此

吉報を受く豈我國文をして漢文を壓倒せしむる

兆ならざらんやとて歡ぶも時にとりての肴あり

けり

劍

大丈夫の腰にこゑある秋の霜もろこしが原の草ものこさず

冬 月

雪をもつ高嶺の雲につつまれておぼろにこぼる月の影かな

池水

月影をくだきなれたるやま風もこほりてひろきにはの池水

霜

庭の面は初霜ふを望朝風にこぼれし木の葉かす見ゆるまで

夕木枯

木枯にふきををらせたる夕山のこすゑさびしき三日月のかけ

雨夜残雁

山寺の旅寐のまくら雨さむしかくれし雁のこゑもきこえて

残紅葉

一さかり秋よりのちの色みせて山したもみぢ夕日さすなり

時雨

花もなき谷の下庵あきくれて苔にしぐれのおとをきくかな

篋氷

山ざとの篋の氷いつまでか世にむすばまてはるをまつらん

河合幼稚園より幼児等にかくる歳暮の卵玉にそ

ふる歌をと乞はれて

鞠もつけ爪をもわけよ諸共にめでたき御代の春をむかへて

明治二十八年五月二日印刷
同 年五月五日發行



著者

發行者

印刷者

印刷所

大和田建樹

東京市牛込區東榎町廿番地

内田芳兵衛

全日本橋區大傳馬町二丁目十六番地(電話千二百七十三番)

松本義弘

全 京橋區弓町十三番地

績文舎

全 所(電話 千百四十八番)

定價 金二十五錢



發兌 老鶴圃

救救救

